

# YEAR BOOK 2020 Vol.45

特集 1：稻垣和子初代ハウスマザーを偲んで

特集 2：第 2 回公開講演会



HAUS DER BEGEGNUNG  
Kyoto International Student House  
(公財)京都国際学生の家

# 公益財団法人京都国際学生の家の成立の趣旨

Kyoto International Student House · Haus der Begegnung Kyoto

## PRINCIPLE AND PURPOSE

by Dr. Werner Kohler

“Haus der Begegnung” is a house where men from different continents and cultures, of different races and colors, different social strata, religions and outlooks live together. The house members face realistically the difference of national, cultural and religious backgrounds. It is a “House of Encounter” as its name “Haus der Begegnung” indicates. It is an experimental training place for peace, which is not merely absence of war, a training place for the construction of a new form of society necessitated by the demands of the world of tomorrow.

The house life is guided by the following considerations.

1. The living together in the International Student House Kyoto is not an end in itself. Nor is it a world of its own. It is concerned with the daily human society to which we all belong. Our human society, as history shows, is in need of constant renewal. Forms of society change, old traditions decline, new ones arise; but Life Together is the destination of man.

2. Life Together is life in relation with others, with those we like and those we dislike, with those who have different convictions and opinions. Life Together means love and respect for those who are different. We have the freedom to agree to disagree with one another.

3. Life Together is life in daily renewal. We all have a natural inclination to favor our own beliefs and concepts. The house members let themselves be mutually questioned and challenged in their opinions, attitudes and habits. By nature we are inclined to have relations with, and fulfill responsibilities to, our own family group and those of our own social milieu or those that are useful to us. We aim to outgrow these self-centered inclinations. Life Together allows for diversity and runs counter to conformity and unconformity. The traditional societies classify people according to their educational, political, moral and financial standards. Life Together transcends these traditional classes.

4. Life Together is an adventure and an experiment. “Haus der Begegnung” in Kyoto practices in small dimension a new form of society. This new society is both conservative and revolutionary in that it respects the past with its traditions and looks to the future with its possibilities. It is a form of society which is renewing itself in free self-criticism of its members. The basis of this Life Together is Life itself.

Thus it is hoped that students living in this house are willing on their own initiative to participate in various activities such as seminar-like meeting, common meals and house chores of different kinds.

\*Dr.Kohler was the most central among the forwarder of HdB in 1965. He and Dr.Inagaki served as the first House Farther.

## 【巻頭言】

### 耐震工事の完了の報告と コロナ禍における「共同の生」の「場」を守る

内海 博司

(HdB 理事長、京都大学名誉教授、19650M, 元 HF)

昨年の YEARBOOK 2019 の「募金活動について」の項で報告したように、十分な募金が集まらなかったことから 2.5 億円の工事計画を 2 つの工事に分けることになった。本館の耐震と老朽化対策の 1.5 億円工事を更に 8 千万円までスリムにして第 1 期工事を完了させれば、少なくとも学生室の家賃の値上げ、3 階の部屋の改造による研究者室の増加とその部屋代の値上げで、銀行から借入金（約 2 千万円）をして、支払いをしながら HdB を維持することができるとして第 1 期工事計画を推し進めてきた。そして引き続き第 2 期工事の西館スカラー室の建て替え工事の募金活動を続けて、この第 2 期工事を完遂すれば、将来は安定した HdB の経営が可能であると報告した。しかし、いざ第 1 期工事を着工しようと 3 社の入札額をみてみると、オリンピック景気で材料費や人件費が 4 倍から 6 倍に跳ね上がっていて、第 1 期工事さえ遂行することは不可能であると判明した。

急遽臨時理事会を開催し、オリンピックが終わるこの 1 年間、工事を延期して値下がりを待つこと等も含めて検討された。しかし結局、大阪万博を控えていることもあり高騰した工事費は 1 年経っても下がらないと判断された。議論の末、皆さまからの真心のこもった拠金と手持ちの資金を使って、初期目標の耐震工事だけは行うことになった。付帯工事として、建物を駄目にする水漏れが多発する各部屋の手洗いの排水管の取替工事、水漏れがあるシャワー室をユニットシャワー室に変更する工事、雨水漏れする壁の修理工事など、主に水回りの工事を中心に行うことになった。また長年指摘されていた古いガス管の交換工事も行った。更に旧式トイレをシャワートイレにして欲しいとして寄附された方々の意向を尊重して、最新のシャワートイレに交換する工事も行われた。（工事完了報告書を参照：5 ページ）

今回、収益増に繋がる工事を行うことが出来なかつたので、工事中に資材置き場として使用した運動場を駐車場（10 台分）にする工事も行った。これら耐震・水回りの工事は全て、学生が退去しなくとも可能な工事だったので、昨年 3 月から 6 月にかけて工事を行い、無事終えることが出来た。「耐震対策を掲げての募金」に、ご支援下さった多くの皆さまにこの紙面をお借りして、感謝を述べさせて頂きたい。

本館の耐震・改修計画は、全ての学生や研究者は 4 月から 8 月まで退去してもらい工事を行う予定だった。そこで 1 年ほど前から、2020 年 4 月には 10 人ほどの学生が残るような受け入れをし、4 月以降にも滞在したいという研究者は断ってきた。そのため 4 月の時点では学生は約 10 人、研究者は 1 人しか滞在しない状況になっていた。学生や研究者が滞在していても工事が可能になったこともあり、2 月から 4 月までに 3 度の入寮希望者の募集を行ったが、数人の応募しかなかった。不思議に思っていた頃、中国武漢市で新型ウイルスの流行が起きて、瞬く間に世界中に広がり、このコロナ (COVID-19) のパンデミックにより渡航制限が行われたことが原因であると判明した。6 月に工事が終わっても入寮希望学生も外国人研究者もいないという、55 年間続いてきた HdB にとって初めての事態に直面した。（コロナ後の世界を参照：11 ページ）

本学寮は、学生が生活をすると自然にかかわりを持つことができるよう、トイレ・シャワー や台所を共同使用する寄宿舎タイプの寮である。そのため 3 密を避けるコロナ対策にどう対処するか、如何に在寮生を感染から守るか等が検討された。玄関の出

入りの際の手の消毒と検温をすると共に、毎日の体温測定、及びマスクを付けることを義務づけることにした。そういう中で、学生の一人が 38℃の熱を出すという事件が起きた。まずは空いていた研究者用の部屋（トイレ・シャワー・台所付き）に急遽隔離し、友人の学生やハウスペアレントが協力して食事の差し入れなどをして 1 週間様子をみることにした。結局その学生は、翌日には体温も平熱に戻り、その後の経過も良好で、4 日後には隔離は解除された。幸いなことに現在一人の感染者も出ずに経過している。

このコロナのパンデミックの影響で、前期（4月～8月）は、新入生歓迎会だけは行つたが（オンラインで）、本来の学生の定例活動（コモンミール、スポーツ、国際食べ物祭りなど）は、全て自粛することになった。秋になり入国も少し緩和され、学生も数人入居し半数の学生の部屋は埋まった。後期（10月～3月）は、新入生歓迎会やコモンミールは開催することができた。これらは本来なら多くの友人や関係者が参加する行事だが、ハウスペアレントと寮生達だけで実行された。しかし 11 部屋ある研究者用の部屋は 1 室しか埋まっていないため、赤字続きの経営状態に陥っている。更に本年は、京都市の外国人留学生地域国際交流等促進事業が無くなり、学生達の活動費も無い状態であった。そこで（公財）中島記念国際交流財団の留学生地域交流助成事業に応募し、幸いなことに助成金を得られ、活動できることになった。心から感謝の意を表したい。また建物の未修復の箇所の資金調達のために、学生達自らがクラウドファンディングを立ち上げた。第 1 目標（30 万円）を達成、第 2 目標（60 万円）も達成、現在は第 3 目標（110 万円）を目指している。

京都国際学生の家は、ヒトは一人では生きては行けない、いろいろなバックグランドを持つ人達と一緒に共生していく必要があり、「家」はその訓練の「場」であるとして造られた。その趣旨は、創設者の W. Kohler 博士が献堂式で話された京都国際学生の家（出会いの家）の「共同の生」に凝縮されている。

この「家」は、国際学術都市京都において、世界各国から来り学ぶ外国人学生と日本人学生とに、学寮という生活の場を提供することによって、異なる国家あるいは民族の間に厳然として存在する人種、宗教、慣習、文化さらにはイデオロギーといったものの相違を、レジデンツ（入居学生）相互に対決(confront)させ、これらの相違を互いに認め合った上で、一個の人格として出会う「共同の生」を体験させる。この様な相互の相違を認識し、相互に承認し合うという、きわめて厳しい努力と体験を通じて得られる寛容(tolerance)が、人類普遍の願望である人類共存の道を達成する有力な手段であり、このことが同じ屋根の下で営まれる「共同の生」の中で実現されると考えている。



このブックスタンドは対決する寮生達を、シンボリックに示したもので、寮の 1 期生は記念品として頂いた。寮生のワニス (Ragai Wanis Ibrahim) 氏が作成した。

このコロナのパンデミックにより、我々は寮の趣旨に反する行動（3 密の回避）を強いられており、この寮にとって大きな試練となっている。しかし現在の京都国際学生の家は、このパンデミックを乗り越えて、寮生達の安全性を保ちながら、寮生が個室に籠もって孤独に陥ることなく人ととの交流が行われ、より一層の連帯感が生まれている状況であり、本当に素晴らしいと感じている。

# ～ 目次—CONTENTS ～

## 【設立理念】

PRINCIPLE AND PURPOSE .....	表 2
-----------------------------	-----

## 【巻頭言】

・内海博司 耐震工事の完了の報告と コロナ禍における「共同の生」の「場」を守る .....	1
【目次】 .....	3

## 【耐震工事完了報告書とコロナ後の世界】

・内海博司／平野克己 本館耐震工事完了報告および今後の展望 .....	5
・内海博司 新型コロナ（COVID-19）後の世界 .....	11

## 【特集 1：稻垣和子初代ハウスマザーを偲んで】

・内海博司 稲垣和子様の思いで .....	16
・川野家捻 稲垣夫人の思い出 .....	18
・Tom Myint The Condolence Letters for the Late Mrs. Kazuko Inagaki	
Dear Natsuko San .....	19
Dear Asa, Dear Family Inagaki .....	20
・山本夏子 娘から見た母の思い出～初代ハウスムッター～ .....	21
・村田翼夫 稲垣夫人（ファースト・マザー）を偲んで .....	25

## 【特集 2：第 2 回公開講演会】

・内海博司 (公財) 京都国際学生の家 第 2 回公開講演会について .....	27
・岩田忠久 生分解性プラスチックは海プラス問題の救世主となれるか .....	29
・Keshav Lall Maharjan HdB での生活、研究及びその後 —途上国における生活向上・食糧確保、学生の教育・研究指導— .....	34
・Geancopoulos, Margaret Two Months at HdB .....	41
・張博訳文 HdB いいね！ .....	43
・Lin, Yi-Kai The track to capture the Japan and world through HdB .....	45
・嘉田良平 国際社会で役だった“京都国際学生の家の経験” .....	47

## 【OM 便り】

・前川佳世子 つながっているということ .....	48
・置田和永 HdB 創立 55 周年記念に寄せて .....	50
・嘉田良平 リスク拡大時代の食と農のゆくえ .....	53
・内海博司 ミャンマーの軍事クーデターに思う .....	56

# 【耐震工事完了報告書とコロナ後の世界】

## 本館耐震工事完了報告および今後の展望

内海 博司（理事長、OM会員、京大名誉教授）

平野 克己（募金委員会事務局長、HdB 評議員）

### 1. 東日本大震災後の耐震強度不足への対応

#### 1.1 耐震強度確認の実施

1.1.1 2016年5月に1級建築士事務所 有限会社キアラ建築研究機関を通して、日本耐震診断協会にて本館の耐震強度の検査を実施、その結果、東西方向は問題無く、1Fの南北方向のみが強度不足が判明した。1Fの広いロビーなどの影響で有り、工法として SRF (Surface Reinforcement) 工法が示された。具体的には柱と壁を特殊な布で被覆する方法で、構造の変化は伴わない。

#### 1.1.2 本館の SRF 工法での耐震強化完了

2020年の2月から5月にかけて、1F ロビーなどを使用禁止として工事を行い耐震工事としての完了を見た。本工事により 1981年に改正された耐震基準にも適応でき、地震に対する安心感を得ることができた。

耐震工事には、建物の作り換えと既存の建物を強化する方法があり、今回 HdB は既存の建物の耐震強度を上げる「SRF 工法」を採用した。

\* SRF 工法とは「しなやかで強靭なポリエステル繊維のベルトやシートを、ウレタン系一液性無溶剤接着剤で鉄筋コンクリート (RC) の柱、壁等に貼り付け、巻き付ける工法」。

HdB の場合、2階から4階までは強度はあるが 1階の広いフロアでの強度不足を指摘されたので、1階の柱、壁を強化して耐震度を上げる方法を取りることができた。本設計はキアラ設計事務所の設計に基づきファステック（株）が実施した。その結果、フロアの柱や壁が少し厚くなつたが、居住には支障が出るほどではない。



写真1 柱被覆



写真2 壁被覆

## 1.2 関連した工事

巻頭言で、理事長が報告しているように、1F の SRF 工事に関連して、1F の台所の器具とガス配管なども更新した。更に全館の旧式トイレを、最新のシャワートイレに交換する工事も行われた。また、資金的に当分建物に関する大がかりな工事が出来ないことを考慮して、建物の耐久性の障害になる水漏れが多発する各部屋の手洗いの排水管の取替工事、水漏れがあるシャワー室をユニットシャワー室に変更する工事、雨水漏れする壁の修理工事（別館も含めた）など、主に水回りの工事を中心に行われた。

## 1.3 運動場の駐車場への転用工事

工事車両の臨時駐車場として南西側の運動場を使用したが、HdB の運営費用捻出のため、一時的に一般駐車場に転用することにした。駐車能力は 10 台。

## 2. 「募金委員会」の発足から解散まで

### 2.1 発足

2017年5月の理事会で研究者棟新築及び本館耐震・改修工事の実施が決定し、同時に吉村委員長、嘉田事務局長の体制で募金委員会が 6 月に発足した。しかし活動内容が膨大なため、同年9月に外部からの平野評議員に事務局長を委託し、内海理事長以下、嘉田理事、永井理事、深海理事、諏訪評議員、樋口事務員を固定メンバーとし、顧問に長尾真京都大学元総長、立石義雄商工会議所会頭を迎へ、京都の主な組織へ活動を開始した。立石京商会頭は多忙な業務の傍ら、当事業の意義を理解され、快く顧問にご就任頂いたのであるが、ご承知のごとく昨年コロナに罹患され帰らぬ人となられた。改めて感謝するとともに、ご冥福をお祈りする次第である。

### 2.2 主な活動

- ①商工会議所を通じて、京都の主な企業（常議員会の委員）へのお願い、訪問
- ②所久雄顧問を通じて、京都仏教会へのお願い、清水寺・金閣寺・銀閣寺に募金箱設置
- ③京都のライオンズクラブ・ロータリークラブへのお願い
- ④OM を通してのお願い
- ⑤クラウドファンディング（A-Port）の実施
- ⑥マスコミを通じてのお願い（京都新聞、中国新聞、毎日新聞、朝日新聞、読売新聞、NHK テレビ放送、朝日放送テレビ等）：朝日放送テレビの放映は、現在も Youtube (<https://youtu.be/7k1YXTM7zWE>) で観ることができる。
- ⑦府庁・市庁等の関係部署への嘆願書持参、支援依頼  
などに、精力的に電話依頼、支援要請書類送付、直接訪問等、募金へのお願いを行った。また工事完了を以って、お世話になった関係各位に工事完了報告と協力御礼の書状を郵送した。

主要な6名の委員は皆70歳以上であり健康が心配されたが、無事最後まで倒れずに完遂して頂けた。

### 2.3 これまでの耐震等の募金総額（特定寄付金）について

2020年6月で募金活動を通じての工事が完了したことで、2017年5月から2020年6月末までの募金総額を示す。その後にも寄附は頂いているが、それは巻頭言でも述べたように、コロナでHdBの経営が悪くなつたことによる通常寄附として計上した。

- ①個人寄付（OM）： 16,325,338円（遺贈1000万円を含む）
  - ②個人寄付： 7,288,674円
  - ③企業・団体： 4,754,000円
- 合 計： 28,368,012円

今回の募金活動を通じてHdBの存在が広く認識され、コロナ渦に因る在寮生減少による運営危機に関しても、引き続きご支援を頂いている状況を付記しておきたい。

### 2.4 工事の内訳の報告

耐震等関係の工事及び排水関係等の工事総計：51,423,874円

- ① 耐震等の工事関係（36,439,949円）：耐震検査費用（3,780,000円）、工事設計・管理費用（8,125,000円）、アスベスト調査費用（276,649円）、耐震工事・キッチン改修工事・ガス管取替工事（24,258,300円）
- ② 排水関係等の工事関係（14,983,925円）：排水管取替工事・シャワートイレ交換工事・シャワー室工事（14,433,925）、雨漏り・地下水漏れ修理工事（550,000円）

これまで西館立替工事の積立（30,000,000円）をしてきたが、本耐震等関係工事までに、電気給湯設備が古くなり電気からガス給湯設備への転換工事（4,370,000円）、地下排水ポンプの入替工事（756,000円），本耐震等工事のために庭木の伐採作業（1,970,000円）のために取り崩して、残高は22,904,000円になっていた。それに募金総額（28,368,012円）を加算すると、工事費総額は51,272,012円となる。そこから工事費用51,423,874円を引くと、赤字151,862円となった。その他、募金活動に必要な交通費（217,600円）や通信費（61,428円）等の必要経費も含めて赤字（430,890円）となり、これらは一般会計から補填された。

### 2.5 解散

募金委員会は2017年9月から2020年7月までほぼ毎月実施し、31回を数えた。結果として予定金額2.5億円の十分の一程度であったが、京都の各界、マスコミなど多くの方々にHdBの存在の意義をアピールすることができた。またOM会の結成とHdB市民公開講座の第1回（2019年6月13日）・第2回（2020年12月12日）を連続開催して組織活動への展望も開け、今後のHdBの運営の方向性が示された。コロナ禍で行われた第2回市民公開講座はオンラインで配信する一方、HdBホームページ（<http://hdbkyoto.jp/>）でその動画を配信中。

### 2.6 今後の課題

現在、運営活動のためのクラウドファンディング（READYFOR：「コロナ危機の国際寮を救って下さい」最初の目標金額は30万円）を行っていたが、募集終了日の2020年12月29日には、最終的に763,000円の寄附を頂いた。これには、マスコミ（京都新聞、読売新聞、毎日新聞、朝日新聞、中国新聞、朝日放送テレビ、NHKテレビ放送）によるHdBの活動に対する共感が示され、京都内外の幅広い支援を受けることができた。紙面を借りてお礼を述べさせて頂く。今後のHdBの運営にも、クラウドファンディングでのサポートの呼びかけの重要性を強く感じた。

### 3. HdB の建物関連の今後

築55年を経過し、基本的には大幅な改造がされていないため、各所に老朽化が見られる。HdBは二組のハウスペアレンツ制をしていたが、2000年に日本人ハウスペアレンツだけになったので、未使用の部屋が多くある。また、地下には暖房のためボイラーを設置していたが、老朽化で廃止したため、地下の部屋にも広い空き部屋が出来ている。2017年の理事会での総合改造計画では、耐震工事に加えて、そのような空き部屋の有効利用も考えて工事計画を立てていたが、残念ながら実現することが出来なかった。今後の課題として引き継がれる。

#### 3.1 本館の居室の増加

本館の間仕切りを変更して居室を増やし収入増を図る。

#### 3.2 研究者棟の更新

西館と呼ばれる研究者棟の建物は内外とも老朽化しており、今回1億円の計画で募金、更新を図ったが実現できなかった。研究者用の宿舎は、これまででも学生達の寮費を補う収入源としての役割があった。今後も、新研究者棟の建設に向けて資金調達も含めて検討を継続していきたい。

#### ＜添付資料＞

多くの報道機関が、このHdBの危機に関して報道をして下さった。次ページの上の記事は、2020年2月4日の京都新聞の朝刊に掲載された。工費が高騰して、予定していた工事が出来なくなり、耐震工事とガス管工事だけにすることになり、学生達は退去をする必要が無いので学生を募集するという内容である。次ページの下部の記事は2020年2月10日に掲載された毎日新聞（朝刊）で、京都新聞と同様な内容である。

その次のページは、2020年9月27日に掲載された読売新聞（夕刊）の記事である。これは私が書いた「コロナ後の世界」を読んだ友人教授が読売新聞記者を紹介して下さって、掲載された記事である。6月の時点で改修工事は終わったのだが、2月から入寮学生の募集を始めたにも関わらず、コロナ禍で留学生が激減して、学生寮としての存続のピンチを招いているという大きな紙面を割いての報道であった。その後、この記事を見た朝日放送テレビのディレクターが取材を申し出て下さって、2020年11月20日

(金)に放送された「コロナ禍で存続のピンチ—55年の歴史ある留学生寮」である。現在もこの内容は、Youtubeに上がっている(<https://youtu.be/7k1YXTM7zWE>)。この時readyforでクラウドファンディングをしていたが、放送と同時に10人ほどが寄附して下さったのには、テレビの影響力の大きさに本当に驚きました。取材をして下さった多くの人達や関係者の人達に誌面を借りて、感謝を述べさせて頂きます。

左京・京都国際学生の家



当初予定額の3倍超 寄生募集は再開

●東京国際学生の家 1965年4月、スイス出身の教師と京都大の教員が中心となり、スイスプロテスチアント教会より資金を受け開校。現在、公認認定団体「京都国際学生の家」が運営し、学生の就寝や研究室の寄宿制的、面接などを収入とする。日本人学生と、1カ国語たりとも3人までの外國人留学生が同居で生活している。

事の実現化しないで済む。この問題は、本邦の現状を考慮すれば、必ずや解決されるべきものである。



補強工事し適當な

四

工費高騰、大規模改修見直し

京都国際学生の家

建設費高騰、見直しへ

「田中」の名前で、  
おまかせで毎日通勤して、  
隣の本屋でトーベ・ヤンソンの  
絵本を読みながら、  
自分の絵本を描いていた。  
それが、『アスカ』  
が完成するまで、  
おまかせで毎日通勤して、  
隣の本屋でトーベ・ヤンソンの  
絵本を読みながら、  
自分の絵本を描いていた。  
それが、『アスカ』  
が完成するまで、

(毎日新聞・朝刊)



## 京都「学生の家」ネットで寄付集めへ

まるで家族人種や宗教、文化の違いを超えた「共生」を掲げ、月2回、寮生が交代で自国での料理を作り、全員で食卓を囲んで「コモンズミール」やスポーツ大会などで交流を深めている。寮生たちは、み込みで世話を担当する「ハウスプレアント」制度を取り入れているのも特徴だ。

半世紀の歴史  
寮は、同志社大教授だったスイス出身のウェルナー・コーラー牧師が発案し、スイスと日本での募金を基に1965年に開設された。地上4階、地下1階で、個室が34室あり、寮費は月3万5000円~4万円。多くの国から学生を集められたため、日本人以外の入寮者も1国に500人までのルームを設けていた。昨年度までに入居したのは中国や韓国、ドイツなど82か国。地域の10355人に上る。

# 国際学生寮 存続ピンチ

## コロナ禍で留学生激減

留学生激減 半世紀の歴史 てもらひます。日本での家  
ができたよまだ」と話す  
寮の運営は、90年まで  
出身のウェルナー  
1牧師が発案し、  
いたが、現在は公益財  
ー同志社大教授だっ

各大学も苦境

留学生と日本人学生が一緒に暮らす「国際寮」は近年、語学力や協調性を養いたい学生向けに開設する大学が相次ぐが、コロナの影響を受けている。

昨年9月、大阪府茨木市のキャンパスに6施設目を開設した立命館大では、留学生の入寮者が1割減った施設もあるといい、寮生同士のミーティングをオンラインで行うなどしている。

2006～12年に4施設を開設した関西大は、共同生活での感染拡大のリスクを考慮し、今年2月以降、新規入寮者の募集を停止。寮生が減った分、相部屋をすべて個室にして感染防止に努めているといふ。

9施設（留学生のみの2施設含む）を有する慶應大では、留学生全体の入寮者数（定員662人）が今年5月現在、前年同月の半分以下の232人に減少。その後も帰国が相次ぎ、9月18日時点で約50人になった。9月下旬からの秋学期の入寮希望者は200人弱いるが、「入国できない留学生も多く、実際にどれだけ入寮するのかわからない」（担当者）といふ。

内海博司さへ(79)は「最も豪華な宿泊室あり、寮費は月  
額100万～4万円。多くは寮生同士のトラブルも多  
く、寮生を集めたが、かたつたが、コミニケー  
ション取扱中でわからぬままのル  
ート感覚できだ。研究しており、昨年度ま  
でしたのは中国や韓  
国、地  
域の人に上る。

まるで家族

ところが、新型コロナ  
ウイルスによる半数

の多シ初月以降、感染拡大を受け、政府が段階的に禁止したことによって、例年は15人程度が新規に入居するが、今年は日平均2人、留学生1人の計1人となりました。入寮が人によどまつたのに辞退してしまっていたのに辞退してしまったので複数いるという。その後も募集をかけていた

トを使って資金を調達で、寮生は9月員の半分以下の16名が駐車場（10台）を一般向けに貸し出しているが、職員の入件数が減少、4月以降、程度の赤字が続いている。

夢るクラウドファンディングを始める予定で、寄付者をコロナヘルプのベントに招待する」ことを考討している。内海さんは「このまちは一年も耐えられないかもしれない。国際人を輩出してきた寮を守るために、力を貸したい」と話す。

内海博司さへ(79)は「最も豪華な宿泊室あり、寮費は月  
額100万～4万円。多くは寮生同士のトラブルも多  
く、寮生を集めたが、かたつたが、コミニケー  
ション取扱中でわからぬままのル  
ート感覚できだ。研究しており、昨年度ま  
でしたのは中国や韓  
国、地  
域の人に上る。

まるで家族

ところが、新型コロナ  
ウイルスによる半数

の多シ初月以降、感染拡大を受け、政府が段階的に禁止したことによって、例年は15人程度が新規に入居するが、今年は日平均2人、留学生1人の計1人となりました。入寮が人によどまつたのに辞退してしまっていたのに辞退してしまったので複数いるという。その後も募集をかけていた

が激新た日本が決人にかく2國をが激新た日本が決人にかく2國を  
人しかいな時点で定員は低めで、人しかいな時点で定員は低めで、  
寮の運動場分としている。寮の運動場分としている。  
費などがかかる月25万円程度で、費用などがかかる月25万円程度で、  
寮側は、ターネット

トを使って資金を調達で、寮生は9月員の半分以下の16名が駐車場（10台）を一般向けに貸し出しているが、職員の入会率がさみ、4月以降、程度の赤字が続いている。

夢るクラウドファンディングを始める予定で、寄付者にコロナヘルプのベントに招待する」ことを考討している。内海さんは「このままでは一年も耐えられないかもしれない。国際人を輩出してきた寮を守るために、力を貸したい」と話す。

## 新型コロナ (COVID-19) 後の世界

内海 博司

(HdB 理事長、京都大学名誉教授、19650M, 元 HF)

### 留学生寮と新型コロナ(COVID-19)のパンデミック

私が理事長をしている留学生寮：(公財) 京都国際学生の家（別称；出会いの家 Haus der Begegnung、HdB）は、この新型コロナ(COVID-19)のパンデミックにより、手痛い打撃を受けている。本学寮は、1965年の4月に開寮した京都で最初の留学生寮であり、日本で最初の日本人学生と留学生が「混住」する留学生寮である。スイス出身のW.コーラ博士という基督教の牧師さんが考えた HdB 構想に賛同したスイス国民と日本国民の拠金で造られた国際協力の寮であり、公的補助も受けずに造られ、民間レベルで維持されてきた。

本学寮を卒立った学生は82カ国1000人を超える、世界で活躍している。その特徴は、日本人は約10人、その他の国は1国3人までという入寮制限があり、学生は京都の大学で学ぶ学生は誰でも入寮できるという原則で運営されている。そこで常に13カ国以上の留学生と（7つ以上の異なる大学の）日本人学生が生活をしている。男女比は1:1である。本学寮では、文化・慣習・宗教・民族・国・イデオロギーなどが異なる若い学生達が、一緒に共同生活をし、違いを肌で感じ、互いの人格を認め合い、切磋琢磨して、将来国際平和に貢献できる人材を育成することを期待している。

しかし、半世紀以上経った建物は現在の耐震基準に合わず、電気・水道・ガスなどのインフラは老朽化しているため、それらを改修するために3年ほど前から大募金活動を行ってきた。しかし十分な資金が集まらないばかりか、東京オリンピック開催と重なり、材料費や人件費が高騰して、予定した工事が出来なくなってしまった。仕方なく耐震工事だけでも行うことにして準備を進めてきた。そのため学生達も4月には約3分の1の学生が残るように、入寮面接の時に学生数を調整してきた。

2020年の2月から耐震工事を始めたが、その頃から中国で非常に伝染力のある新型ウイルスが流行しているという噂が出始めていた。耐震工事の他に、旧式のシャワーや旧式のトイレも一緒に取り替えるという工事も進めていたが、肝心のシャワー・トイレットは、中国からの部品が調達できないというので大幅に遅れることになった。日本が生み出したシャワー・トイレットが実は多くの部品が中国で造られていることを知った。そして、新しく生まれ変わった学寮に4月から新寮生を向かえるため、1月、2月、3月と3度も入寮生の募集をしたが、数人の応募しかなかった。半世紀も本学寮を続けていて初めて学生が集まらないという異常事態に直面した。

本学寮は、自由で自主的な生活を通して、多様性を受け入れる民主主義の基本を学ばせ、将来を担う人材を養成する場として造られた寄宿舎型の「家」である。当然、台所・トイレ・シャワーも共有、一緒に作り食べる国際色豊かな食事会（コモンミール）や、卓球や

ビリヤード室での遊び、ダンスパーティーなどの楽しい行事は、コロナを防ぐ3密禁止に、全て接触すること気づかされた。特に 1. 密閉空間（換気の悪い密閉空間である）、2. 密集場所（多くの人が密集している）、3. 密接場面（互いに手を伸ばしたら届く距離での会話や発声が行われる）という3つの条件が同時に起きる状況は、若い人達が一番好む、いや共同生活では避けて通れない空間が拒否されたのだから大変である。一刻も早く3密を可能にするワクチンなどの医薬品の開発が急がれる。

更に厳しい現実として、留学生が入国や出国できなくなり、帰国出来なく寮に留まつたり、日本人学生も大学が始まらず、インターネットでの授業となり、入寮を希望していた学生もコロナの感染が怖くて、入寮を辞退する学生も出てきた。

共同生活で感染を防ぐには、唯一「密閉空間」を作らないことで3密を避ける方法しかなさそうである。しかし、留学生寮で留学生が居ないのでは留学生寮とは言えず、更に部屋が埋まらないのでは経済的にはやっていけない。後1年ほど本学寮を維持する余力は無く、多くの人達のご支援を仰がなければならない状況に追い込まれている。

### 新型コロナのパンデミックと世界保健機構(WHO)

今回のコロナのパンデミックでは、同種のコロナウイルスによる重症呼吸器症候群であるSARSやMERSの対応に比べて、世界保健機構(WHO)の初期の対応のまずさが浮き彫りにされている。

中国武漢の李文亮（リー・ウェンリヤン）医師が2019年12月30日に原因不明の肺炎の警告を出したのを問題視した警察が1月3日に李氏を呼び出し、社会秩序を乱す発言をしたとして訓戒処分とした。更に中国国営メディアも「原因不明の肺炎についてデマを流し、8人が摘発された」と繰り返し報道するという隠蔽工作が行なわれていた。しかも、残念なことに警告を出した李氏がこのコロナで死去したことである（2/7）。

このような状況下の2020年1月5日にWHOは「旅行や貿易の制限を実施するまでの必要はない」と世界に向けて不可思議な発信をした。そのお陰で来日した中国からの観光客は1月の1カ月間で92万人にも昇った。他国でも同様な状況であったであろう。そして中国が団体旅行禁止措置を出したのは1月27日である。中国とWHOの陰謀によって1月16日に武漢からの観光客を乗せた奈良のバス運転手が日本での患者第1号となった。日本も重い腰を上げ、同月28日にCOVID-19を指定感染症に指定した。それによって、①患者に対する入院措置②入院費の公費負担③診断した医師に報告義務④積極的疫学調査（接触者調査）等が可能になっている。

1月20日になり中国政府は新型ウイルスの大流行について緊急事態宣言を行い、3日後には武漢を封鎖した。その10日後にWHOはやっと「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」を宣言したが（1/30）、2月3日のWHO執行理事会では、中国の新型肺炎対策を高く評価して「各国は事実に基づき、科学的・理性的に全体計画と各方面への配慮を両立させるべきだ。防備は必要だが、過度に反応する必要はない。WHOは各国にいかなる渡航・貿易制限措置も提言しない」と強調して、世界にコロナを拡散させた、つまりパンデミックを

起こさせた。

中国式の封鎖は中国だから出来ることで、民主主義国家で同様なことは出来ないことを理解できないテドロス事務局長のような人物がトップに立っていることこそが、既に WHO が機能していないことを象徴している。WHO は 3 月 11 日になってやっと新型コロナのパンデミック宣言を出したが、内容は宣言というより、そうとも言うことができますよ (can) という当事者ではなく第 3 者の言い方である (We have therefore made the assessment that COVID-19 can be characterized as a pandemic)。この事務局長が率いる WHO は、この新型コロナのパンデミックの水際作戦を率先して行うという気持ちはなく、中国に忖度しているとしか思えないのは、アメリカのトランプ大統領だけでは無いであろう。今後も起きうる新たな伝染病を率先して水際で食い止め、パンデミックを起こさないようにする国際機関としては失格である。

## 人類と感染症

人類の感染症の歴史は長い。微生物がヒトや動物・植物などの宿主に寄生し、そこで増えることを「感染」といい、その結果宿主に起きる病気が「感染症」(別称；伝染病、疫病、流行病等)である。感染症がヒトにとって脅威となったのは、農業や牧畜を覚えて「定住化」するようになり、過密なヒト集団ができたことにあると考えられている。

微生物はもともと我々のご先祖様であり、殆どは納豆菌・酵母菌等有用で、ヒトに無害なものが多く、有害なのはホンの一部である。ヒトの腸の内部には腸内細菌と云われる細菌が約 3 万種類、100 兆-1000 兆個が生息し、その重量は 1.5kg-2kg になると云われている。一方ウイルスは細菌よりも小さく(大腸菌が 2~4 μm、インフルエンザウイルスは 0.1 μm)、自己増殖ができない。しかし遺伝子 (DNA か RNA) を持ち、細胞の中に入ると増えることができるが、塩や砂糖のように結晶にもなることから、生物と非生物の両方の性質を持つ生物である。その起源は諸説あるが定かではない。国際ウイルス分類委員会の報告では、3 万種くらいのウイルスが見出されていて、哺乳類と鳥類に感染するウイルスは約 650 種だそうである。

人類の歴史でのパンデミックを起こした感染病としては、東ローマ帝国時代のペストで 2,500 万人～1 億人の死者、14 世紀の黒死病(腸ペスト)で 5,000 万人、メキシコの天然痘で 800 万人、ロシア風邪で 100 万人、スペイン風邪で 5,000 万人、アジア風邪で 110 万人、香港風邪で 100 万人、HIV 感染症(エイズ)で 3,200 万人以上の死者数といわれ、ペスト以外は全てウイルスに因るものである。日本での天然痘は新羅から弥勒菩薩像が送られ、敏達天皇が仏教の普及を認めた頃で、日本古来の神をないがしろにした神罰という噂が広がった。大流行の 2 年間(735 年から 737 年)で約 100 万人の死者が出たと言われている。そこでウイルス=病原菌と思われるが、細菌と同様ヒトに有害なのはホンの僅かである。ヒトゲノム(人間の遺伝情報)の 45% に「ウイルス」や「ウイルスのようなもの」が見いだされ、「ウイルスのお陰でヒトが進化できた」と考える学者もいる。実際、哺乳動物の胎盤形成に必須の遺伝子の一つがウイルス由來のもので、胎盤の機能を進化させる上で重

要な役割を果たしていることが知られている。

パンデミックの終息には4つの道、すなわちウイルスが変異して弱毒化して共生するか、強毒化して宿主を殺し自滅するか、集団免疫ができるか、ワクチンが完成して広く世界に行き渡るかであろう。

ヒトは家族で生活し、集落や都市で他人と濃厚に接触しながら社会制度を進化させてきた。いったんヒトに感染するとウイルスの変異などもあって、ヒトからヒトへの感染が起き、さらに国を超えて繋がる最速の交通網により感染が世界に広がる。ウイルスには30億年の歴史があり、パンデミックを防ぐことは不可能に近く、共生していくしかない。

## コロナ後の世界

コロナのパンデミックによって、HdB のシャワー・トイレット工事が進まなかつた経験や、多くの工事や車の組み立てが中国からの部品が届かず、ストップしたニュースを聞き、現在の物流システム（サプライチェーン）の欠陥を知ることになった。出来るだけ安い労賃を求めて中国に部品工場を造ったことを反省して、再び日本でも工場を作り、複数の国でも作るというグローバル・サプライチェーンを構築することが必要になるだろう。

更に東京のような政治・経済・物流等が集中化した大都市は、如何に感染症に弱いかが明らかにされた。今回のコロナ禍で、多くの会社が感染防止策として、IT やインターネットを用いた在宅ワークを実践して、代替できる仕事が多いことに気付いた。これを機に、働き方改革が推進され、政治・経済・物流等の機能を地方に分散させたネットワーク社会が構築されると思われる。

今回のコロナパンデミックで「特別定額給付金」が出たが、マイカードで請求した自治体で混乱が起きたことで、行政のデジタル化の遅れが暴露された。早急に行政のデジタルサービス化を図る必要がある。

更にコロナ患者が多く出て、ホテルを仮の病室代わりに使うことになったが、公的な建物の空間利用に関して、柔軟な対応が出来るように設計段階から考えておく必要がある。単に感染対策だけではなく、今後起きる大きな自然災害（地震や台風、津波、高潮など）にも対応できることになると思われる。サービス業はどのようにして密を避けるか、やはり人工知能（AI）を搭載したロボットの活用が急速に進むと考えられる。

特に、コロナ対策で学校が閉鎖になり、学校教育が大きな被害を受けた。しかし普通の講義などはオンラインで可能な部分が多いことが明らかになり、学校での教育とは顔を合わせ互いに議論をさせ、実験などで探求する場であることが痛感された。全国の子供達がどこで生活をっていても、教育が機会均等であるためには、上下水道や電気等と同じように、IT やインターネットの普及徹底を、国を挙げて行う必要がある。教育こそが日本の未来を救う。

感染症では、老人の致死率が高い。日本も含めて世界的に高齢化が進んでいる。どのようにして多数存在する老人ホーム等での集団感染を防御する方法があるのだろうか。現在の老人ホームのあり方を再興する良い機会だと考えられる。世界の報道では、今回のパン

デミックで医療崩壊に陥った病院の話や医療従事者の過重労働問題、更には命を救う高価な機械をどちらの患者に使って救うのかという厳しい命の選択を迫られているという現実が浮き彫りにされた。コロナ禍でオンライン診療が始まったが、今後はオンライン診療の制度が緩和され、普及することを期待する。

それだけではない。自然災害が頻繁する現在（7月に入っての梅雨前線の停滞で起きている九州全域での水害）、避難所でのコロナ対策をどうするのか。あるいは水害で駄目になる食料等の安定確保のためには、どうすれば良いのかが問われている。農業の工業化ばかりでなく、病気や温度に多様な性質を持つ多品種を栽培することも奨励する必要があると思われる。大きな東京のような大都市に大きな金を投じるのではなく、日本の各地に自然災害に強い土地を選んで、その機能を分散する小都市を作るような、長いスパンで日本列島・日本社会を考える時期であろう。

このようにコロナ後の世界である21世紀は、コロナ前の日常生活には戻らないであろう。密閉、密集、密接の3密を防ぐ社会とは、非接触・非対面社会となると思われるが、それはAI、IT、富岳のようなスーパーコンピューター やロボットが活躍する仮想現実と現実社会が入り交じったような世界かも知れない。さてさて若者にはスムーズに移行できるが年寄りは難しいだろうか。否、明治生まれの我々の祖父母が如何にスムーズに、この電気器具が溢れる世界に慣れ親しんでいたかと思うと心配無用、ヒトほど柔軟に新しい環境に適応する能力を持つ生物はない。

新型コロナのパンデミックで、反グローバリズム、自国中心主義、ナショナリズム、ポピュリズム等が世界の国々で台頭してきている。しかし、グローバリゼーションを辞めるわけには行けない。交通網が発達した現在、ますます世界は協調・協力して情報を共有し、感染拡大や自然災害を防ぐ必要がある。感染阻止を名目に、個人情報開示や言論統制をする国が顕れているが、個人の自由と権利を侵害する独裁・強権社会に歯止めをかけるにはどうすれば良いのかが問われている。そういう意味で、ますます我がHdBの理念のすばらしさとその存在意義を痛感している。

HdBは耐震補強工事に関する募金委員会を発展的に解消し、今後のHdBの健全な経営継続を支援する「HdB SDGs 支援委員会」を発足させ、広く皆様にご協力・ご支援を仰ぐことになった。このSDGs (Sustainable Development Goals) とは、2015年9月の国連サミットで採択された、2016年から2030年までの「持続可能な開発目標」を指す\*。SDGsの最大の特長は「未来のあるべき姿(理想像)」を掲げた上で、「バックキャスティング(backcasting)的な思考」(ありたい姿・あるべき姿)から“いま”を考える思考法)で考える点にある。

コロナ後の世界では、多くの人達がSDGsで掲げられた17のゴールの社会的課題を、現在の延長線上に想定される未来を考えるのではなく、バックキャスティングで解決に取り組んで行って欲しいと期待している。HdBもSDGsの17ゴールの中からHdBの理念を実現するゴールに絞り、バックキャスティングで目標を明確にし、幅広く皆様のご協力をお願いしていきたい。

\* <https://www.jp.undp.org/content/tokyo/ja/home/sustainable-development-goals.html>

# 【特集 1：稻垣和子初代ハウスマザーを偲んで】

稻垣和子様の思いで

内海 博司

(HdB 理事長、京都大学名誉教授、19650M, 元 HF)

稻垣家の長女の山本夏子さんから「稻垣母がなくなりました」というメールを 2020 年の 8 月 2 日に受け取り、本当に驚きました。7 月の始めに和子夫人から元気な声で「光明さん（HdB の初代事務員）の電話を教えて欲しい」という電話を受けました。その時の張りのある電話から 1 ヶ月も経たない内に老衰のため（7 月 29 日）亡くなられるとは想像もつきませんでした。後で聞くと、後で送られた痩せられた和子夫人の写真と体重が 30kg しかなかつたいうのを聞いて納得したものでした。

本当に長いお付き合いをして頂きました。始めて HdB でお会いして 55 年になります。初代日本人ハウスマザーとして、スイス人ハウスマザーのネリー・コーラーさんと協力して、本当にハウスの裏方として切り盛りされる姿を見て、京大教授の奥様とは和子夫人のような方をいうのであろうと感心したことが思い出されます。

その後、当時中学生であった夏子さんの夏休みの宿題を手伝ってと云われて、引っ越したばかりの長岡京のお家に伺い、シダ類の標本作りを手伝った時に、お家でご馳走になったことが思い出されます。

その後は、稻垣理事長時代に常務理事として、2000 年の大改修の募金活動をしていた頃に、後ひと踏ん張りする必要があった時に、和子夫人が昔同じ町内に住まわっていた任天堂の創業者の奥様とのお付き合いという仲で、自ら交渉して下さって多額の寄附を頂いたお話を和子婦人から直接お聞きしました。今回の募金活動では、もうかっての創業者は亡くなられて居られないので難しいといわれたことが印象深く残っています。稻垣理事長が癌を患って、その治療のことで相談を受けたりしたこともあり、家族ぐるみでお付き合いをしていました。

特に、亡くなられた稻垣理事長の葬儀のお手伝いをすることになり、打ち合わせでお会いすることが多々ありましたが、本当に記憶力抜群で、良くそんな細かなことまで覚えていらっしゃると感心するばかりでした。また、一度電話を受けると 30 分は序の口というほど、お話が途切れないので、こちらに用事があるときには、どう上手く電話を切るか、苦労することが良くありました。

HdB との出会いは、和子夫人がキリスト教徒であったことで、京都洛陽教会で遠藤彰先生を通じてコーラー夫妻と出会い、夫を紹介したのが始まりであると聞かされていました。その後の長い HdB 設立と初代日本人ハウスペアレンツとして活躍され、

稻垣先生が長く常務理事そして理事長をされていたことで、ご夫婦二人三脚で HdB のお世話をしていたことから、HdB は自分たちが生み出した子供のような存在であったと思われます。和子夫人は何時も HdB の状態を心配されていました。ピアノの先生もされていたこともあり、また娘の夏子さんが声楽をされていたことで、HdB の卓球室兼ピアノ室を借りて挙げて、女性達の歌の練習場として良く使われ、少しでも経済的に役立てて欲しいと HdB に使用料を支払って下さっていました。それだけに、現存するグランド・ピアノの状態は常に気にされていました。

再興記念式典に会わせて、稻垣ご夫妻で HdB の北西の角に植樹された「スダチ」が、今では大きくなっています、毎年多数の果実を実らせています。それを頂く毎に、植樹されていた稻垣ご夫婦のお姿が思い出されます。

稻垣和子夫人が亡くなられたことで、HdB の創設にたずさわったコーラー夫妻・稻垣夫妻、全員が鬼籍に入ったことになります。コロナのパンデミックが起き、存続の危機に陥っている HdB を、全員が集まった天国で、久しぶりの再会を喜びつつ、我々がどう乗り切るかと、ヤキモキしながら応援して下さっていると思われます。

心からご冥福をお祈り申し上げます。



2001.10.20 の再興記念パーティーにて  
HdB の玄関の受付で、私、和子夫人、  
夏子さんと記念写真です。あれから早  
くも 20 年が過ぎました。

稻垣先生の古稀のパーティーにて  
夏子さんからお借りした稻垣ご夫妻の写真。和  
子夫人が気に入っていた写真で、写真立てに飾  
ってあったそうです。(1994 年)

## 稻垣夫人の思い出

川野 家稔

(1965年OM)

1965年にHdBがスタートした年に最初にHaus Vaterとして在任されたのは設立者のDr. Kohler夫妻と日本側では稻垣博先生夫妻でした。稻垣先生のご家族は夫人の和子様と純君、夏子さんのお二人のお子さんでした。

日本でのHdB設立ですが、Kohler先生は当時スイスのHdB Zuerichに居られましたので、設立具体化準備作業は稻垣先生お一人の肩に掛かっていた、といつても過言ではなかったようです。これは、開所式のスピーチでKohler先生が開所の準備には自分は何も出来ず、稻垣先生に全てを委ねることになったことを申し訳なく思う、と仰ったことでも判ります。

Haus VaterとしてはKohler先生ご一家と稻垣先生ご一家でスタートしたHdB Kyotoでしたので、稻垣夫人は私たちの気付かない生活面での環境立ち上げに大変なご苦労をされたに違いありません。

稻垣夫人は大変社交的な方で、レジデント全員と分け隔てなく交流をされておられました。たまたまHdBにはピアノがあり、私も子供の頃に少しだけピアノを囁いたことがあったものですから、下の部屋で弾いておりましたら、夫人が傍へ来られて、どこで習ったのか、など親しくご質問いただきました。そこまでは良かったのですが、後日何処かの音楽コンサートに出かけましたら、何と稻垣夫人が出演者としてピアノを弾いていらっしゃるではないですか。しまった、と思いましたが後の祭りで、こんなこともきっかけで何時も親しくお声を掛けて頂くことになりました。

卒業後も時々長岡京の稻垣宅へお邪魔をさせて頂きました。稻垣先生含め何時も親切にしていただき、お宅からの帰りには駅まで遠いので車で送ろう、と稻垣先生自らが運転をして下さったことを今でも覚えています。稻垣先生がお亡くなりになった後もお邪魔をさせていただいたことがありましたが、丁度お昼頃になったので、あり合わせのものしかないがお昼を食べて行って下さい、とご馳走になってしまったこともあります。

その後、夫人は施設に入られたようですが、時々横浜の自宅までお電話を頂戴しました。明日の朝、こんなテレビ番組が放送されるから、是非見られたら、のような内容が多かったですし、HdBのレジデントになった後輩の消息をお聞きになられたことも多かったです。このように、夫人は私にとっては、まるで姉のような存在でした。

今年(2020年)7月にお亡くなりになり、寂しい限りです。心からご冥福をお祈り致します。



## The Condolence Letters for the Late Mrs. Kazuko Inagaki

トンミン(Tom Myint)さんは、ハウスの第1期生で稻垣和子夫人がハウスペアレントをされていた時にお世話頂いた。和子夫人のハウスへの行き届いたサービスと貢献に対する感謝の気持ちが込められている。

Dear Natsuko San,

I am really saddened by the news from Utsumi San, the sudden passing of your dear Mother. She has been a kind, warm and caring House Mother to all of us students at the House. We shall always remember and thankful for her sincere loving cares given to all of us students.

Natsuko San, I have not seen you for over 50 years, hope you and your family are all doing fine.

Please accept my heartfelt condolences.

Tom Myint  
Toront, Canada



左上の写真は、稻垣家族の写真(稻垣先生の授賞式) 左から、長男の純氏(故)、和子夫人(故)、博先生(故)、長女の夏子さん

左下の写真は、コーラー夫妻の来日した機会を捉えて、1期生が集まって歓迎パーティーを楽友会館で行った記念写真。前列右から稻垣博先生と和子夫人、ネリー夫人とコーラー先生、後列には懐かしい顔が並ぶ。



ベロニカさんは、ハウスの創始者コーラー先生の次女で現在はイスラエルにお住まいされている。ハウスに滞在さ

れたころはまだ中学生で、長男のゲオルグ君、長女のケティさんと一緒に神戸のインターナショナルスクールに通学していらっしゃった。週末にハウスに戻って、稻垣家の博先生、和子夫人、長男の純君、長女の夏子さん等と接する機会は多かった。当時の名前は、フローニであった。

"The garden of the world has no limits except in your mind..." Rumi

Dear Asa,

Dear Family Inagaki,

Please accept our deepest condolences on the loss of your mother, mother-in-law, grandmother, great grand mother Kazuko Inagaki.

We are proud to have known her for such a long time as a neighbour and family friend since the 1950ties - she was watching not only over all her family members but also over the big family of the Haus der Begegnung in Japan and abroad. She contributed strongly to strengthening the family ties between the Inagakis and the Kohlers.

I was happy to meet her again during my visit in 2012 with my husband Henri.

Now, we are very sad that she is no more!

Hoping that you can together remember her and tell each other all the family tales- we send you our warmest regards,

Veronika and Henri



左上の写真は、和服姿のベロニカさん、左下は若き日の和子夫人とケティさんとベロニカさん。右の写真はベロニカさんのお孫さん？

## 「娘から見た母の思い出～初代ハウスムッター～」

山本夏子（稻垣和子 長女）

この度は亡き母の特集を組んでくださり有難うございます。

稻垣和子は1927年(昭和2年) 1月1日に大阪で生まれました。母の両親(村田次郎、よし枝)は京都府綾部の出身で二人は子供の頃からキリスト教会での友達だったそうです。

父親は東京高等師範学校(現 筑波大学)で内村鑑三の門下に入っていたり、後に大阪南区にある市立南高等学校、初代校長を務め、昭和21年に退職。母親も同志社で勉強して、その後教師をしていたと聞いています。

明治19年生まれの母親が教会で日曜学校を開き、オルガンを弾いていたので自然と音楽に接すること多く、母も、10歳上の兄もピアノやバイオリンを習い信仰と音楽に満ち溢れた家族だったように思います。

昭和22年 和子は母校の大坂市立女専(現 大阪市立大学)に就職。和子の父親の亡くなる前日に非常勤講師で来ていた私の父、博に出会い、昭和24年に結婚。その運命的な話は、母から何回も聞かされました。

結婚式はもちろん教会で挙げたため、私の想像するところ稻垣家は仏教徒なのでさぞかし驚いて、なんという嫁がきたものか、と思ったに違いありません。だから、母にとって学生の家の生活は水を得た魚の様だったと思います。

昭和40年4月から兄は高校、私は中学に入学。同時に学生の家がオープン。私たち一家の生活は大きく変化しました。

母はそれまで自宅でピアノ教室を開き、数多くの生徒さんを教えていました。そのため家には通いのお手伝いさんがいて、夕食の支度などをしてもらい、母はレッスンをしていたので、私はいつも学校から帰って、カバンをそっと置いて遊びに出かけしていました。

それが学生の家の入居を機に母はそれまでの仕事をやめ、ハウスムッターに専念したのです。母38歳の時です。ハウスの生活は、毎日それはそれは楽しかったです。まず、毎日色々な国的学生さん達が遊びに来て、珍しい話を一杯聞かせてくれました。其のころ流行っていたカレーの宣伝で「インド人もビックリ」というのがあって、インド人の学生さんが、「日本のカレーは本当にインド人もビックリだ」と言っていたのを思い出します。本場のカレーを作ってもらい、それを食べた時の衝撃。全く違うものでした。それまで母の料理を余り食べたことがなかったので、我が家ではお袋の味がハウスで習ったマトンのグーラッシュ(ハンガリー料理と後に知りました)、オックスステールスープ、タンシチュー等々。これまでに食べたことのないメニューばかり。(現在ではマトンもオックスステールも入手しにくい。タンも現在のように焼き肉用の薄い

のではなくベロのまま肉屋にありました。50年以上前に手に入ったのが今思うと不思議です)。母は筑前煮を作るとどこの国の方も喜んで下さることを発見。コモンミールではいつも作っていたと思います。

母が亡くなつてから遺品を整理していたら、茶色く変色したざらばん紙に書かれたレシピが大量に出てきました。きっと母もメニューに困って色々調べていたのがわかります。

中国系の学生さんとは漢字で話すと通じること。北京語と広東語では余り通じなくて、二人は日本語と英語で話していること。英語の話せない母でしたがいつも皆と色々な方法で会話をしていました。

ハウスの生活はたった2年でしたが、父や母は結婚式によばれ日本の親代わりの役を務め、ハウスを出てからも、今日までそのお付き合いは続いています。

父が亡くなった時も、今回の母が亡くなった時もお電話やメールを戴きました。兄が闘病生活をしていた時、東京国立癌センターに、アメリカ在住のProf. ガネボラが見舞いに来て下さり、癌センターのドクターがビックリしていたと兄から聞きました。ハードな日本滞在中にもかかわらず、わざわざ会いに来て下さったこと、本当に喜んでいました。あのたった2年間が、本当に尊いもの、人と人の交わりを教えてくれました。

父たち発起人が意図した理想の姿の様に思えます。そして父の思いを、母もしっかり理解し、支えてきたこと、この2人3脚が上手く行っていた証だと思います。

父は亡くなる前、母に白洲次郎が信念としていた「戒名、葬式、墓無用」と言っていたそうです…が、現実は父が親しくしていた和尚様が寝ないで考えてくださった素晴らしい戒名(霧澤院廣博日峯居士)。そして葬式、後日行われたキリスト教式、追悼式、お墓と父の意に反したオンパレード。遺骨はライン川にまいてくれ、と言っていたのに…。当時80歳の母が一人でどんどん進めて行きました。私たちは後を追いかけるばかりでした。でも、母の通りにして良かった。もしライン川に散骨していたら、ひ孫たちが手を合わせておじいちゃんの事を思う場所がないのですもの。

母が90歳になった頃 私が「お葬式はキリスト教でして欲しい?」と尋ねると、ずっと返事をしませんでした。今年6月、母は「景月院法和日琴大姉」と自分で作った戒名をお寺に送り、お寺から了解のお返事戴いたから、と突然言われ、びっくりさせられました。戒名を考えていたことなど全く寝耳に水の事でした。母はその約1か月後の7月29日早朝に老衰でなくなりました。93歳です。お葬式は勿論日蓮宗であげました。

亡くなる10日ほど前に母から、シューマンの歌曲を自分が亡くなつたら歌って欲しい、と小さく折りたたんだ楽譜を渡されました。シューマンの歌曲と讃美歌は、亡くなつたその日の夜、私の自宅で、母の亡骸の前で親しかつた方々を呼んでのミニ前夜式で歌い、聖書の朗読もしてもらいました。母の魂がそのあたりを浮遊しているころ、母は喜んで聴いてくれていると確信しています。

母が亡くなつて、お悔やみのお手紙を頂戴した中に、父の大親友だった方の娘さんからの手紙で心に残つたものがあります。手紙をそのまま書きます。

「私の母は叔母様が父や叔父様と対等に活き活きとお話をされることを、まぶしく、羨ましく思っていたと話してくれた事があります。叔母様はお生まれになるのが早すぎた方だといつも思っていました。今であれば、豊かな表現力とプロデュース力で優秀なキャリアウーマンとして大活躍をなさつたのではないかでしょうか。父は叔母様の事をずっと和子女史と呼んでいました。叔母様らしく生きられたことにブラヴォーと心からの拍手を贈りたいと思います」と戴きました。私も母は生き切つた人だと心から思います。

年が明けて、母が逝つて、6ヶ月が経ち、やっと母の書類の山の片付けを始めました。想像はしていましたが、出てくる出てくる、手紙の山。自分の書いた手紙もコピーしてあるので、すごい量です。その中で HdB の yearbook に書いた遠藤彰先生の追悼文を読み返しました。以前読んでいるので初めてではないのですが、今これを読みかえして謎が解明しました。

- ①父が何故このハウスと関わりを持つようになったのか？
- ②ノンクリスチャンの父がどうやって神学者の先生方と交友関係を結べたのか？  
生涯の友と呼べる、ヴェルナー先生。そしてフリッツ先生。

秘(余) 談を一つ。

父は無類の猫好きでした。我が家にはづ～と猫がいました。それも雄猫が。

ある時新しい猫がやってきて、皆で名前を考えました。

恥ずかしい話ですが、我が家にはネーミングが苦手！という悩みがありました、そんな中で、父が言いました。「この猫の名前はヴェルナーにしよう！」

それ以降ヴェルナー猫は悪戯をする度に皆から思いつきり「ヴェルナー・こら～」と叱られ、ヴェルナー先生も笑ってみておられました。ヴェルナー先生を思い出すと、あの時の光景が思い出されます。

話を母に戻しますと、母はクリスチャンファミリーで育つてきましたので京都洛陽教会に通っていたようです。その当時牧師をされていた方が遠藤彰先生のお父上で、結婚式司式もして頂き、式の奏楽が偶然彰先生だったそうです。ここから彰先生と母との関係が生まれ、そしてミッションへと父は導かれて行きました。そんな折、ドイツ留学の話が起り、ドイツ語をペニガー氏に習う事になったのです。きっとこれも母が陰で糸を引いていると思います。

父はなんでも母に相談していました。母は自分の交友関係の引き出しから、父にいつも最適なものを提供していましたから。全て、母の人と人とを結びつけるのが大好きな性格から始まっています。今、膨大な手紙や様々な資料に埋もれて片付けをしている私には、その当時の事が目に浮かんできます。さらに詳しくお知りになりたい方は VOL.34 の「遠藤彰氏と私」をご覧ください。両親のライフワークに関して其々方法は異なりますが、子々孫々まで平和な世の中が続いて欲しいということでした。戦

争を経験してきた二人に課せられた責務と考えていたようです。

これまでならこの文は兄の純（2012年にすい臓がんのため死去）が書くはずのもので、そういう文章にはいつも母のチェックが入り朱色で添削されました。今この私の文章を読んだ母は何と言うかな？ 聞いてみたいです。

2020年12月記



2007年6月、父の亡くなった年に  
女四世代で母の大好きなディズニーランドへ

和子(80歳)→夏子(娘)→孫→曾孫(2歳)

母譲りのディズニーファンは次世代に受け継がれています。



和子(90歳)

純の子供と一緒に父(博)の墓の前で 今は母もここで眠っています。

2018年6月

ハイアットリージェンシーホテルにて母のピアノの教え子二人とランチ、この日を境に介護生活に。老健に四ヶ月、その後介護付き有料老人ホームへ。

## 稻垣夫人（ファースト・マザー）を偲んで

村田 翼夫  
(HdB 理事、Year Book 編集委員長、筑波大学名誉教授)

2020年8月はじめに稻垣和子夫人ご逝去の報に接し、大変寂しく感じた。

私たち第1期生のハウスにおける生活は、暗中模索の面が多かったが、その時期にハウス生活の伝統的スタイルが形成されたように思う。当時のハウスペアレンツは、とても重要な役割を担っていた。特にハウスマザーは、家に居てレジデント、とりわけ外国人留学生の相談を引き受けいらっしゃった。稻垣夫人は、誰とでも分け隔てなく対応されるので話しやすいということもあったであろう。私の記憶では、中国系で寂しがり屋のローさん、ティアさん(シンガポール)、チョクロさん(インドネシア)、それにガネボーラさん(スリランカ)、ウィチャイさん(タイ)たちは稻垣夫人と話す機会が多かった。トンミンさん、ミョーウインさん、オンジョーさん(ミャンマー)、ヴェルヴィタさん(スリランカ)達もよくお世話になっていた。おかげで、彼らは故国の家族と離れた寂しい外国生活から解放され、学業に専念しつつ諸活動に積極的に参加できるようであった。

また、ハウスチームの構成員や会議発言の時に、特定の国のメンバーに偏らないよう公平さを心がけ、議長に助言していらっしゃったことも思い出される。コモンミールの食事も、当時は、ハウスマザーがかなり手伝ってくださっていた。娘の夏子さんの報告を読むと、母上が沢山記入された料理メニューのメモが出てきたとのことであるが、いろんな料理の工夫をされていたことが理解できる。

もう一人のハウスマザーであったネリー夫人(コーラー先生奥様)と稻垣夫人はとても仲が良く両家の関係は親密であった。それに息子さんの純君が、一時ハウスの個人部屋に滞在されたこともあり、レジデントとよく交流されていた。コーラー先生宅(3階)もしばしば訪ねていたようだ。娘さんの夏子さん(当時中学生)もいて、コーラー先生の息子さんのゲオルグや娘さんのケティ、フローニやバーバラと年齢が近いこともあって親しく親睦を図っていらっしゃったので、家族的な国際交流の雰囲気が強く感じられた。エリザベートはまだ幼かった。もっとも、ゲオルグ、ケティやフローニは、神戸のインターナショナル・スクールに行っていたので週末にハウスでよく見かけた。

個人的には、稻垣夫人の元の性が村田であり、父上が筑波大学の前身である東京高等師範学校ご出身だったということもあり、昔のご体験に関してもいろんな話を聞かせていただいた。それに思い出すのは、ハウスの生活ばかりでなく長岡京の自宅に何度も招かれたことである。そこで留学生たちと一緒にクラシック音楽を聞かせてもらったり、美味しいおやつや料理をいただきたりしながら、国際交流を楽しませてもらった。その時、稻垣夫人の気さくではつらつとした態度のお陰で交流の場はいつも盛

り上がっていた。また、長岡京名物の筈を何度も贈っていただき恐縮した。

稻垣夫人はクリスチャンと聞いていたのに、以前に日本式の稻垣博先生のお墓に案内してもらい驚いたことがある。それは宇治黄檗の万福寺の裏山にあり、丁度、先生が研究を推進された研究所を一望できる場所に作られていた。それを嬉しそうに説明されたことが思い出される。稻垣夫人もその墓に入られたそうである。

稻垣夫人と過ごした楽しい日々はもう戻ってこない。しかし、ハウスのインターナショナルで家族的な伝統は維持されているし、今後も存続するであろう。そのことを念じつつ稻垣夫人（ファースト・マザー）のご冥福をお祈りする次第である。



上の2枚の写真は、開寮当時のコモンミール風景。

写真左は、稻垣和子夫人がスピーチをしている。手前にネリー夫人、ミヨウイン、コーラー先生、右の写真には和子夫人の奥に夏子さん、横にはバーバラ（コーラー先生の3女）の姿が見える。

右の写真は、稻垣博先生の墓の前で撮った和子夫人と私。和子夫人の後ろの女性はコーラー博士の長女ケティ・コーラー嬢



## 【特集2：第2回公開講演会】

(公財) 京都国際学生の家  
第2回公開講演会について

内海 博司  
(HdB 理事長、京都大学名誉教授、19650M, 元 HF)

3年以上に及ぶ耐震・老朽化対策の募金活動を通じて、当学寮が京都で最初の留学生寮であり、日本で最初の混住型の留学生寮だが知名度は低く、開寮以来千名を超える卒寮生がいたにも係わらず連絡が取れる卒寮生数は300名程であった。そこで本学寮の国際、社会、将来に対する意義について幅広い広報活動を行い、支援団体・支援者を確保していくことや、より多くの卒寮生(OM: Old Member)達のサポートも必要であると感じた。そこで卒寮生の会(OM会)を発足させ、多くの京都市民に(公財)京都国際学生の家の存在を知って頂く目的で、卒寮生及び在寮生達による第1回公開講演会が2019年6月8日(土)に楽友会館で開催され、待望のOM会も結成された。

本年も、第2回OM会主催の市民公開講演会を、2020年6月13日、京大楽友会館で行う予定をしていましたが、コロナの影響で



京都国際学生の家  
Haus der Begegnung (HdB)

### 第2回公開講演会 入場無料・マスク着用

日 時：2020年12月12日(土) 12:50～16:10

場 所：京都大学楽友会館 〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町

HdBは昭和40年より55年間、外国人学生と日本人学生の出会いの家として活動してきました。

その歴史と現在の活動状況、未来への展望を卒寮生の講演と共に紹介させていただきます。

開会の辞 内海 博司(理事長、京都大学名誉教授)

#### 第I部 HdBから育った科学者

13:00～14:00 高性能な生分解性バイオプラスチックの開発：

　　プラスチックと人類の共存・共栄を目指して

　　岩田 忠久(東京大学大学院農学生命科学研究科教授)

14:00～14:40 京都国際学生の家の生活、及びその後：

　　途上国の生活向上、食糧確保、留学生の教育・研究指導について  
　　ケシャブ・ラル・マハラジャン(広島大学教授大学院国際協力研究科教授)

#### 第II部 HdBの過去、現在、未来

14:50～15:30 外国人学生及び日本人学生から

在寮生有志

15:30～16:00 国際社会で役立った”京都国際学生の家の経験”

　　嘉田良平(理事 四条畷学園大学リハビリテーション学部教授)

閉会の辞 村田 翼夫(理事、筑波大学名誉教授)

参 加：来場歓迎。どなたでも参加できます。

●ご来場にあたっては、マスク着用、手指消毒、検温、記名入場、ソーシャルディスタンスを確保のうえ、感染防止対策にご協力下さい。

●万一発症された方がおられた場合は、保健所等の求めに応じ記名入場者リストを提出します。

主 催：公益財団法人 京都国際学生の家

連絡先：京都市左京区聖護院東町10

電話/FAX: 075-771-3648

ホームページ：<http://hdbkyoto.jp/en/home/>

本公演会の費用の一部は(公財)中島記念国際交流地域交流事業財団の助成金による。

12月12日(土)に延期して、別紙のように開催した。コロナ下でオンラインでも配信、その講演の動画は現在ホームページにて公開中である。今回の公開講演会開催では(公財)中島記念国際交流財団の助成金を頂いた。

チラシと、2020年12月9日（水）の夕刊に掲載された（公財）京都国際学生の家の記事と第2回公開講演会の記事。

## <HdB から育った科学者>

### 生分解性プラスチックは海プラ問題の救世主となれるか

東京大学大学院農学生命科学研究科

教授 岩田忠久

私は 1987 年の京都大学農学部 3 年生から修士 1 年生まで 3 年間、HdB に在籍しました。毎晩、夜遅くまでビリヤードに興じたり、コモンミール、ハウスミーティング、国際食べ物祭り、春や秋の旅行、全てが楽しく、非常に有意義なときでした。その後、フランス政府給費留学生としてグルノーブルにあるフランス国立科学センターに留学しましたが、HdB で多くの留学生と接していた経験から留学先でも非常に楽しい時を過ごすことができました。今、コロナ禍で世界が小さくなり、人の往来が規制されています。いつかまた、多くの留学生が HdB に入寮し、日本人学生と共に素晴らしい時を過ごせる日が来ることを祈っています。

この原稿は、第 2 回公開講演会の内容をまとめたものです。研究対象としている環境中で分解するプラスチックが、現在世界で大きな課題となっているプラスチックのごみ問題（特に、海洋プラスチック問題）の解決の一助となることを目指して開発に取り組んでいます。専門でない方にも、少しでも知っていただければ幸いです。

#### 1. はじめに

現在、海洋マイクロプラスチック問題に代表されるように、非生分解性石油合成プラスチックの廃棄物による環境汚染が地球規模の解決すべき重要な課題となっている。その解決策の一つとして、環境中の微生物によって水と二酸化炭素にまで完全に分解される「生分解性プラスチック」の開発が望まれている。さらに、エネルギー使用量の増大に伴う化石資源の枯渇、プラスチック焼却に伴う地球温暖化、二酸化炭素排出削減などの社会的要請から、再生可能なバイオマスを出発原料として生産される「バイオマスプラスチック」の重要性も高まっている。現在、「生分解性プラスチック」と「バイオマスプラスチック」を総称して、「バイオプラスチック」と呼ぶ（図 1）。



図 1： 環境に優しいバイオプラスチックの循環図

## 2. バイオプラスチックを正確に理解する

現在、研究開発がなされているプラスチックを、出発原料と生分解性の有無の観点で分類すると、表1に示すように4つのカテゴリーに分類される。

環境にやさしいプラスチックの概念のもと最初に研究開発が進められたのは、土壤、河川水、海水などの環境中で分解する生分解性プラスチックであった。理想的な生分解性プラスチックとは、「使用中は通常のプラスチックと同様に使用でき、使用後は自然界において微生物が関与して低分子化合物、最終的に水と二酸化炭素にまで完全に分解されるプラスチック」と定義されている(図2)。したがって、生分解性プラスチックは、環境保全に貢献するという観点で環境にやさしいプラスチックであり、生分解するという機能に大きな意味があることから、原料が石油であるのか、再生産可能なバイオマスであるのかは問題ではない。

表1 バイオプラスチック  
(バイオマスプラスチックと生分解性プラスチック)

	バイオマス資源 バイオマスプラスチック	化石資源 石油合成プラスチック
↑ 機能付与 生分解する 生分解性 プラスチック	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ポリ乳酸 (PLA)</li> <li>・微生物産生ポリエステル (PHA)</li> <li>・ポリブレンサクシネート/アシバート (PBS/PSA)</li> <li>・多糖エステル錯離体 (DGE&lt;2,0)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ポリカプロラクトン (PCL)</li> <li>・ポリブレンアシバート/テレフタレート (PBAT)</li> </ul>
↑ 機能付与 生分解しない	<ul style="list-style-type: none"> <li>・バイオポリエチレン</li> <li>・バイオポリプロピレン</li> <li>・バイオPEET</li> <li>・バイオポリアミド</li> <li>・バイオポリウレタン</li> <li>・多糖エステル錯離体 (DGE&gt;2,0)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ポリエチレン (PE)</li> <li>・ポリプロピレン (PP)</li> <li>・ポリエチレンテレコラート (PET)</li> <li>・ポリスチレン (PS)</li> <li>・ポリ塩化ビニル</li> </ul>

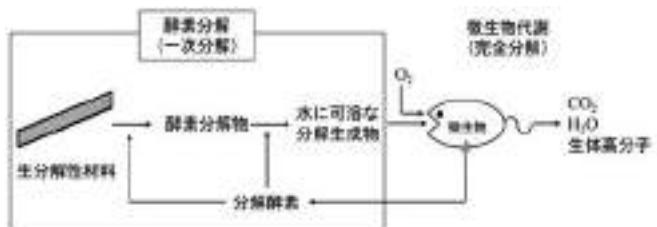


図2：生分解性プラスチックの土中分解と分解機構

一方、バイオマスプラスチックとは、再生産可能資源であるバイオマスを原料として製造されるプラスチックのことである。大気中の二酸化炭素を光合成により固定化した植物あるいは木質バイオマスを出発原料していることから、たとえ廃棄後に焼却されても、発生した二酸化炭素は再度固定化されるというカーボンニュートラルの概念のもと、環境にやさしいプラスチックとして考えられている。したがって、バイオマスプラスチックが、生分解性を有しているか否かは問題ではない。

つまり、生分解性プラスチックとバイオマスプラスチックは、環境にやさしいプラスチックとしてひとくくりにされることが多いが、決して同じではなく、生分解性という機能に着目しているか、石油からバイオマスへの原料転換に着目しているかで、本来は全く異なるコンセプトのプラスチックである。

特に注意しなければならないことは、バイオマスプラスチックは「植物からつくら

れたプラスチック」と宣伝されることが多いことから、全て環境中で分解されると誤解されがちである。決してそのようなことはないことを理解しておく必要がある。

### 3. 生分解性プラスチックの課題と今後求められること！

生分解性プラスチックは「生分解」することに意義がある。生分解性プラスチックの利用用途としては、環境中で利用される分野と分別回収が難しい分野の2つが考えられる（表2）。しかし、その生分解性にも、コンポスト分解、活性汚泥分解、土中分解、河川・湖水分解、海水分解、深海分解などがある。現在、国際標準化機構（ISO）により分解環境に応じた生分解性試験法が順次発行されている。単にフィールド分解試験のみならず、有用

分解微生物の単離や  
そこから得られる精  
製した酵素による分  
子レベルでの分解機  
構の解明も、推進しな  
ければならない重要  
な基礎研究である。こ  
のような「生分解性」

の観点から、いくつか必ず将来必要とされる基礎研究を列挙したい。

表2 生分解性プラスチックの期待される用途

分 野	用 途
自然環境中で利用される分野	農林水産用資材
	土木・建設用資材
	野外レジャー用品 水船用資材
有機廃棄物のコンポスト化に有用な分野	食品容器包装資材
	衛生用品 日用品、雑貨類
	多目的フィルム、農薬・肥料用の除草性被覆材 移植用苗ポット、釣り糸、漁網、ノリ網など 荒地・砂漠の雑草用保水素材、工事用の保水シート、 土のう袋、稚生ネットなど ゴルフ、釣り、マリーンスポーツなどの使い捨て製品 洗剤材、分散材、洗剤
生鮮食品用のトレー、ファーストフードの容器、 弁当箱など 紙おむつ、生理用品など ごみ袋、使い捨てのコップなど	生鮮食品用のトレー、ファーストフードの容器、 弁当箱など 紙おむつ、生理用品など ごみ袋、使い捨てのコップなど

#### ① 生分解性プラスチックの種類を増やす

現在開発されている生分解性プラスチックは、ポリ乳酸、微生物產生ポリエステル、ポリブチレンアジペートテレフタレート、ポリブチレンサクシネート／アジペートなど、生分解性ポリエステルのカテゴリーのみ、数種がわずかに生産されているに過ぎない。筆者らは、様々な結合様式を有する高分子多糖類をエステル誘導体化することにより、これまでの石油合成プラスチックにはない、優れた熱的性質や物性を有する生分解性プラスチックの開発に成功している。ポリエステルのみならず、様々な構造と優れた性能を有する生分解性プラスチックを開発し、多様な使用用途に応じた要求性能を満たさなければならない。

#### ② 環境分解性の正確な認識

一口に生分解性プラスチックといっても、どのような環境で分解するのかを明確にし、それを一般消費者にわかるようにしなければならない。そのためには、開発した生分解性プラスチックが実際にどの環境下（コンポスト、活性汚泥、土中、河川水・湖水・海水、深海）で分解するかを正確に把握し、それを表記する制度を確立しなければならない。

例えば、ポリ乳酸はコンポストでのみ分解し、身の回りの土や水環境では分解しない。図3は、筆者らが作製した微生物產生ポリエステルのフィルムの環境水を用いた

BOD 分解試験の結果である。同一サンプルでも環境により分解の速度が異なることから、一口に環境水といつても大きく異なることを理解しておく必要がある。

筆者らは、NEDO 先導研究プロジェクト「様々な生分解性プラスチックの海洋分解性評価（研究代表者：岩田忠久）」で、生分解性プラスチックや石油合成汎用プラスチックからなるフィルム、繊維、射出成型品など 74 種類を静岡県初島沖の深海 850 メートルに 2019 年 9 月に沈めた（図 4）。1 年後あるいは 2 年後に引き上げ、本当に深海で生分解性プラスチックが分解するか、どのような微生物が付着しているかなどを報告したいと思っている。

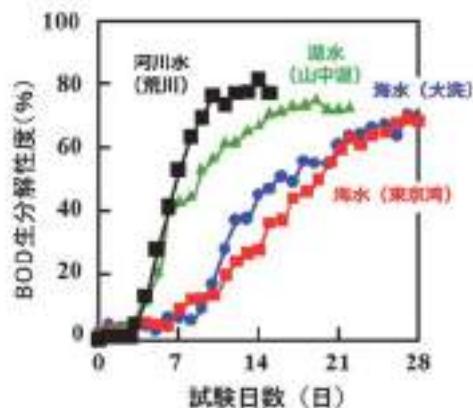


図 3：微生物産生ポリエステルの環境水を用いた BOD 生分解性試験



図 4：深海 850m に沈めているサンプル

### ③ 生分解性開始機能と生分解性速度のコントロール

使っているときは決して分解が起こらず、使い終わって不要となったとき、あるいは、環境中に流出した時、生分解が始まる機能を付与する（図 5）。さらに、使用目的に応じて自在にその生分解速度がコントロールされている材料設計を行う。

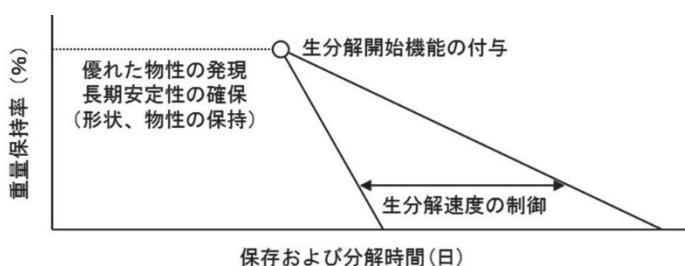


図 5：生分解性プラスチックにおける分解開始機能と分解速度の制御の概念図

### ④ 分解酵素・分解微生物のデータベースの確立

様々な環境下での分解試験の実施を行い、環境中から分解微生物を単離し、一つの微生物がどのような酵素を何種類分泌しているか、あるいは複数の微生物が協同作業でプラスチックを分解しているかなど、分解微生物の観点からの研究を活発化する。

### ⑤ 化学構造および分子構造からの生分解性プラスチックのシミュレーション

コンピュータを用いて、環境中で分解しやすい生分解性プラスチックの化学構造をシミュレーションする。さらに、分子鎖構造、結晶構造、高次構造の観点からも、分解速度の予測なども行う。高分子構造学との連携が必要である。

#### ⑥ 本当の意味でのマイクロプラスチック問題の解決

現在問題となっているマイクロプラスチックは、数ミリ角のプラスチックである。今後さらに問題となるのは、衣料の洗濯により排出されるミクロンオーダーの繊維くず、化粧品や歯磨き粉などに入っているナノ粒子など、目に見えないナノプラスチックである。どのようなプラスチックが、どのような形状で使われているかを正確に判断し、プラスチック表面へ吸着した様々な化学物質、添加剤や分解途中の中間生成物の生体への影響なども含めて、そこから生じる課題を未然に予測し、対策を図ることが必要である（図6）。

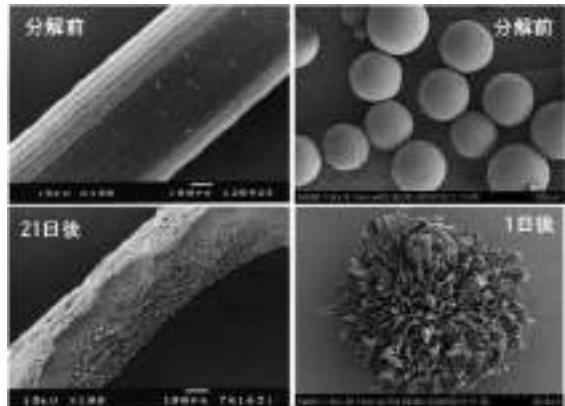


図6：生分解性プラスチック繊維と微粒子の分解途中の走査型電子顕微鏡写真

#### 4. おわりに

海洋マイクロプラスチック問題がクローズアップされ、プラスチックが全てがまるで悪者のように取り上げられるようになったが、その中で、にわかに生分解性プラスチックへの期待が高まっている。「困難だが、実現によって大きなインパクトがもたらされる、壮大な目標・挑戦のこと」を「ムーンショット」という。使っているときは優れた機能を発現し、使用後、仮に自然界に流出した場合、速やかに分解が始まる高機能な生分解性プラスチックの創製が必要である。また、使用目的に応じて分解速度が自在にコントロールできることも重要な要素である。人類とプラスチックは共存・共栄することに大きな意味があり、次世代の研究者には、大いなる野望を抱き、未知なる世界に向けて挑戦することを期待している。

#### 略歴

- 1985年4月 京都大学農学部林産工学科入学
- 1987年4月 京都国際学生の家 入寮（1990年3月まで）
- 1989年3月 京都大学農学部林産工学科卒業
- 1992年8月 フランス国立科学研究中心・植物高分子研究所に留学
- 1994年3月 京都大学大学院博士課程単位取得認定退学、博士（農学）
- 1996年10月 理化学研究所・研究員
- 2006年11月 東京大学大学院農学生命科学研究科・助教授
- 2012年3月 同上・教授
- 2018年4月 東京大学・総長補佐

## HdB での生活、研究及びその後 —途上国における生活向上・食糧確保、学生の教育・研究指導—

Keshav Lall Maharjan ケシャブ ラル マハラジャン（ネパール）

広島大学大学院人間社会科学研究科・教授

(1984 年 4 月～1987 年 3 月 京都国際学生の家レジデント)

### 1. はじめに

私は Hause der Begegnung (HdB=ハウス；スイスミッショն) に 1984 年 4 月 (京都大学農学部農林経済学科修士 1 年生)～1987 年 3 月 (同博士 1 年生) の 3 年間住んでいたネパールから来たケシャブ ラル マハラジャンです。ハウスでは Team のバイスチエアマンをはじめ色々な当番をした。その中で一番大変だったが一番ためになったのはイヤーブック (Year Book) 当番である。HdB の生活・活動を通じて多くの人・こと・アイディアと「出会い」、学び、成長し、一種の自己アイデンティティを形成したかもしれない。それと同時に脱 egocentrism (自己中心性) の重要性も理解した。

私が認識する HdB には『100 人の「学」』がいる。彼らは世界村から集まって来ている。彼らは世界村の色々なところからきているから、思うこと、言うこと、考えること、成すことなど全てが違う。それは彼らが背負っているものが違うから？そうかもしれない。でも時々皆で一緒に同じことをする。そこではひらめきがあり、共通項が多く発見され、普段できそうもないことも見事にできちゃうの。その成功例が次への土台となる。HdB はその場を提供し、レジデンツ、ハウスペアレンツ・ファミリー、職員をはじめとする関係者がその環境づくりをしてくれるからそのようなことが容易になる。各自が協同する方法は違えども皆の目的はただ一つ。それは「出会い」と「学ぶ」ことである。その目的はまた「世界の人々が安全で安心な生活を安定的に暮らし続けるために地球を守り、平和な社会をつくる」という次の目的達成のための一手段に過ぎない。』

私はこの目的を達成するため、学びつつ、実践を試みている一人の HdBian である。私が行っていることとは「途上国における人々の食糧確保・生活向上」を主要なテーマとする教育研究活動である。とりわけ私は国際協力、留学生を含む学生の教育・研究指導に努めている。それには HdB で学び経験したことが梗になっている。HdB の生活・活動を通じての多くの「出会い」と脱 egocentrism の重要性を理解することによって私はその後の生活・仕事・教育研究におけるいかなる「出会い」も滞りなく対応ができるようになった。とりわけ未知の世界・地域に行ってそこで出会う全ての異文

化(価値観、宗教、生活習慣、言葉、食事など)に問題なく対応し、目的(調査研究)の実施に集中することができている。世界中どこへでもフィールドワークに出かけることができ、人々の生活向上・食糧確保に関する調査研究を実施し、その成果をまとめ、教育研究活動を推進することができている。

## 2. 学生時代の研究とその成果

博士課程における主研究テーマは「バングラデシュにおける農村在住者の食糧確保と生活向上」であった。この研究は京都大学、JICA の共同研究プロジェクトの中で京都大学の教官、学生らのチームを中心に、バングラデシュ農村開発をテーマに探求する総合的研究のサブテーマとして推進された。西村博行、海田能宏教授らの指導の下、学生らはバングラデシュの農村に住み込みで調査を実施した。私もその研究チームの学生として南部バングラデシュのチャンドプル県の村に住み込みで調査研究を進めた。ハウスに住んで3年目は数回、1回約2か月間調査に出かけていた。調査に行く前には黄熱病、マラリア、破傷風、肝炎など複数の予防注射をうっていた。私が住み込みで調査したムスリム村はデルタ地帯にあり、電気がなく、雨季には屋敷地以外は浸水し、村内移動は小型の木舟、バナナの木でできた浮きマットなどを使っていた。

調査には、参与観察、聞き取り、アンケート、グループ会談、イベント参加、共同生活などの方法を適宜に使った。村人と同じくルンギ(腰巻)を巻き、シャツを着、田んぼの「江」で水浴びをし、時には裸足で、通訳あるなしに関わらずベンガル語を駆使し、彼らと一緒に食事をし、モスク礼拝に参加し、イマーム(イスラームの指導者)、老賢人、村長、村役人、主婦、男女の青壮年、学生、子供らと日常的に話をし、村の昔、今、そして彼らが描く将来の把握に努めた。ハウスの生活経験があるからこのような住込み現地調査をなんとも思わずこなすことができたと思う。この調査研究の内容を村の歴史、生活、就業構造、農業、経済活動、社会構造及び村の変容に関する村人の意見、将来構想に関する考え方などのテーマにまとめ、K. L. Maharjan, 1989. *Agricultural and Rural Development in Bangladesh: Phanishair Village in Chandpur* (バングラデシュの農業農村開発-チャンドプル県ファニシャール村) JICA, Bangladesh (写真1)より出版された。学生時代に出版されたこの本は私の処女作である。その本作り作業、とりわけ章別構成、各章のレイアウト、体裁、編集にはイヤーブック当番としてHdB Year Book 1985, Volume 9-10(ハウス創立20周年号)を作り上げた経験が非常に役立った。

その後さらに、同じくデルタ地帯に氾濫する河川を中心に輪中型堤防を作り、輪中の河川の入り口と出口に水門を作り、輪中内の水を制御し、灌漑網を整備し、安定的農業を行い、食糧増産、生活の安定化が図られている村の調査研究を進め、先のデ

ルタ村と比較分析を行い、バングラデシュの農家経済の変容についてまとめた。それは 1990 年に京都大学に提出した博士学位論文(写真 2)、*Impact of Irrigation and Drainage Schemes on Rural Household Economies in Bangladesh* (バングラデシュの農家経済活動における灌漑排水事業の影響)です。広島大学に赴任後、博士学位論文を加筆し、広島大学地誌研究センターが K. L. Maharjan, 1997. *Impact of Irrigation and Drainage Schemes on Rural Economic Activities in Bangladesh*, Research Center for Regional Geography, Hiroshima University, Japan (写真 3)として出版した。学位論文をまとめるにも先にまとめたデルタ村の本の経験が参考になった。このことは以降、フィールドワークを中心に一次資料を収集し、データを構築し、分析を行い、研究成果をまとめるという一連の作業の基礎となっている。

### 3. 研究成果の社会還元

1990 年に広島大学に赴任して間もなく 1994 年に広島で開催されるアジア競技大会に向けて広島県民にアジアの国・地域に関する情報を発信し、親しんでもらうため、アジアの国・地域について連載することで中国新聞社から声がかかり、ネパールとバングラデシュを担当することになった。両国において、3 か月にわたってその時までの研究成果・知見を書き下ろした記事が週 1 回載った。それが反響を呼び、その後広島県、広島市、各区、公民館より講演依頼が殺到した。私が書いたいくつかのフレーズが記者や読者に引用もされた。今でいう再ツイートだね。中国新聞社よりこの連載をまとめ 1994 年に『アジアを語る 13 人の視点』(写真 4, 5)として出版された。

2015 年ネパール大地震で多くの被災者が出了。その緊急支援、復興復旧のため募金活動し、現地に支援物資を届けた。被災地におけるその後の復興復旧の状況を伝えるべくカトマンズ盆地では一番被害を受けた地域で募金を使っていち早く支援物資を送った地域の調査を行い、別の地域で調査した他の研究仲間と一緒に古今書院発刊『地理』2017 年 9 月号(写真 6)「特集：ネパール大地震後の地域と社会」に寄稿した。

### 4. 研究交流、関連分野へ研究拡大

まずは同じ農業経済、農村開発に関するテーマに学生時代の研究成果の一部を海田能宏編 2003 『バングラデシュ農村開発実践研究』コモンズ(写真 7)に収めた。

その後、海外の研究者と人類学の観点から推進したネパールに関する研究をオーストラリアの人類学者の編集で出版された本、Michael Allen ed., 1994. *Anthropology of Nepal: Peoples, Problems and Processes*, Mandala Book Point, Kathmandu, Nepal(写真 8)に収めた。同じくネパールについて地域研究の観点から推進した研究を石井溥編、K. L.

マハラジャン他著 2005『流動するネパール—地域社会の変容—』東京大学出版協会(写真9)に収めた。

またネパールの政治、社会、経済の動態、民主化問題について内外の研究者との共同研究の成果を南真木人、石井溥編 2015『現代ネパールの政治と社会』明石書店(写真10)及び Mahendra Lawoti ed., 2007. *Contentious Politics and Democratization in Nepal*, Sage Publications, New Dehli, India(写真11)に収めた。そしてインドの農村経済の変容における共同研究の成果を福井精一編 2014『新興アジアの貧困削減と制度』勁草書房(写真12)に収めた。

## 5. 国際学会活動・研究交流

海外の研究者らとも交流を進め、研究成果を国際的に発表し研究の向上を図ることが多い。関連国際学会・シンポジウムに参加し、個別論文を発表したり、セッションを企画しグループで発表・批評したり、座長として発表をまとめたりし、その成果を本に出版することがある。その数例として S.S. Acharya et al. ed., 2002. *Sustainable Agriculture, Poverty and Food Security*, Volume 1 & 2, Rawat Publications, Jaipur, India(写真13, 14) ; Jamalludin Sulaiman et al. ed., 2005. *New Challenges Facing Asian Agriculture under Globalization*, Volume I & II, Malaysian Agricultural Economics Association & Universiti Putra Malaysia Press, Selangor Darul Eshan, Malaysia(写真15, 16) ; Hiroshi Ishii et al. ed., 2007. *Social Dynamics in Northern South Asia*, Volume 1 *Nepalis Inside and Outside Nepal*, Volume 2 *Political and Social Transformations in North India and Nepal*, The Japanese Association for South Asian Studies & Manohar Publishers and Distributors, New Delhi, India(写真17, 18)がある。

## 6. 教材作成

研究成果を教育に活用し学生に伝授するために教材作成にも取り組んできた。その成果は放送大学ラジオ講座に活用され、出版されている本には河合明宣編 1995『発展途上国産業開発論』放送大学教育振興会(写真19)及び河合明宣編 1999『発展途上国の開発戦略』放送大学教育振興会(写真20)がある。また、広島大学国際協力研究科農村経済学のリーディングリストとして挙げられている教材には、K. L. Maharjan and B. P. Nayak, 2012. *Livelihood Vulnerability and Adaptation Strategies in Climate Variability and Changes in Rural India*, Graduate School for International Development and Cooperation, Hiroshima University, Japan(写真21)がある。

## 7. 研究の展開・地球的課題の取り組み

近年地球温暖化に関する諸現象は研究界においてもホットな話題である。地球温暖化の原因は人間生活の営みを主源とする温室効果ガスの排出の急増であり、その結果、気温の上昇、降雨量の変動・不安定化に代表される気候変動が起きていると理解されている。気候変動が我々人間生活において大きな影響を与え、とりわけ生活が貧弱である途上国の脆弱層の人々の生活を脅かしている。彼らの生活では温室効果ガスの排出はほとんどないのに気候変動による影響を真っ先に受けるという皮肉な状況である。この地球的課題は途上国の農村生活者の営み、農業に対して一番打撃を与えていているといわれる。ゆえに今まで実施してきた「途上国における人々の食糧確保・生活向上」を主テーマとする研究をより充実させ今後とも推進するにはこの気候変動の問題を避けて通ることができない。以上の認識の下、20世紀に入ってから展開した問題の研究には K. L. Maharjan and N. P. Joshi, 2013. *Climate Change, Agriculture and Rural Livelihoods in Developing Countries*, Springer Japan, Tokyo (写真 22) ; K. L. Maharjan ed., 2014. *Communities and Livelihood Strategies in Developing Countries*, Springer Japan, Tokyo (写真23) がある。気候変動に関するアジア的視点に関する共同研究の成果には S. Singh and M. Sharma ed., 2012. *Climate Change: An Asian Perspective*, Rawat Publications, Jaipur, India (写真 24) がある。

## 8. 次世代の教育研究者の育成

これらの教育研究活動を通して今まで広島大学大学院国際協力研究科で 30 人の学生に主指導教員として博士学位論文の指導を行った。彼らの研究の成果が認定され広島大学によって博士号が授与された。そのうち何人かの学生の研究はその後さらに展開し、共同で専門書として出版した。その代表的な成果には N. P. Khanal and K. L. Maharjan, 2015. *Community Seed Production Sustainability in Rice-Wheat Farming*, Springer Nature, Singapore (写真 25) ; Sutiyo and K. L. Maharjan, 2017. *Decentralization and Rural Development in Indonesia*, Springer Nature, Singapore (写真 26) ; L. Piya, K. L. Maharjan and N.P. Joshi, 2019. *Socio-Economic Issues of Climate Change*, Springer Nature, Singapore (写真 27) がある。そのうち *Socio-Economic Issues of Climate Change* は第 70 回地域農林経済学会年大会(2020 年 10 月, 京都大学)にて特別賞を受賞した。

## 9. 今後の課題

今後の研究では、気候変動、持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals = SDGs)に関連するテーマで地球と人類が共存することについて考究したい。とりわけ環境保全型農業を軸に、食と農について知見を深めたい。環境保全型農業の課題は日本など先進国においても重要である。これをきっかけに日本を対象とする研究も積極的に再

開する予定である。日本における環境保全型農業として関心を引くのは「いのちを育む農法」である。その手始めとして新潟県佐渡市で実施されている「朱鷺と暮らす郷づくり」について研究を開始した。この農法は歴史を持ち伝統的農法が継承され、佐渡島全体がトキの繁殖・生息地となるように社会全体が一丸となって取り組んだ。その結果、付加価値を生み、かつ生活の一部となっているとして2011年に国連機関の世界食料農業機構(Food and Agriculture Organization = FAO)がこの取り組みを「トキと共に生する佐渡の里山」として世界農業遺産に認定した。この研究は先進、途上国と関係無く実施できるので今まで推進してきた「途上国における人々の食糧確保・生活向上」を主テーマとする研究は「環境を守りながら全人類の食糧確保・生活向上」を目的とする研究に展開できるような気がする。これを今後の研究目的をすることを考えるだけでもワクワクする。この向上心を程よく抑えながら研究を進めなければならない。

そしてこの新しい研究目的もまた「人々が安全で安心な生活と暮らしを安定的に続けるために地球を守り、平和な社会をつくる」ことにつながらなければならない。私はこの目的を達成するため、今以上に学び続けることとする。それをもって一人のHdBianでありつづける。

\*本稿は「国際学生の家第2回公開講演会(2020年12月12日)」の話の要約である。

#### 略歴

- 1979年4月 来日 東京外国語大学付属日本語学校入学
- 1980年4月 京都大学農学部農林経済学科入学
- 1984年3月 京都大学農学部農林経済学科卒業
- 1986年3月 京都大学大学院農学研究科農林経済学専攻修士課程修了
- 1989年3月 京都大学大学院農学研究科農林経済学専攻博士課程修了 研究指導認定
- 1990年1月 同上退学
- 1990年2月 広島大学総合科学部・助手
- 1990年5月 農学博士(京都大学)
- 1992年4月 広島大学総合科学部・専任講師
- 1995年1月 広島大学総合科学部・助教授
- 1995年4月 広島大学大学院国際協力研究科・助教授
- 2006年2月 広島大学大学院国際協力研究科・教授
- 2020年4月 広島大学大学院人間社会科学研究科・教授

## [出版文献写真一覧]



1



2



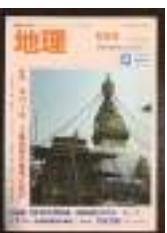
3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14



15



16



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26



27

## < HdB の過去、現在、未来 >

### Two Months at HdB

Margaret Geanacopoulos (USA)

Kyoto University

Isolation. If there were any word that I would have used to describe this year so far it would have been isolation. Since March, as most of us have been, I had spent most of my days in my room alone, working on my computer, joining zoom meetings, and desperately trying to keep in contact with friends who I had not seen in months. While I was lucky enough to live with my parents and have their company and support, I spent more time alone this year than any year before. I had totally forgotten what it felt like to have a community.

The days leading up to my departure to Japan in October were some of the most stressful I had ever experienced. It wouldn't be my first time coming to Japan - I had studied abroad in Osaka for a year in university. But I knew this time would be different. There would be no one to hold my hand through each step of the way. I was moving to a new country, as an adult, and I would have to do it on my own.

While consulting with my advisor, Dr. Motoki Akitsu, in the days before my departure, I expressed to him my worries about finding a place to live in Kyoto. He briefly mentioned an international dorm that he used to live in as a student and said he would inquire if there were any rooms available. Of course, this dorm was HdB. After finding out there was room for me, I immediately accepted the offer, desperate for a place to live. Little did I know that decision would be one of the best ones I had made all year.

Unable to say goodbye to my friends and family due to COVID restrictions, I arrived in Japan feeling scared and alone. These feelings were only exacerbated by the two weeks I was forced to stay in quarantine in a hotel in Tokyo. I arrived at HdB unsure of what to expect. It's never a good feeling to be the new kid, especially in a foreign country. I worried that my new housemates would be too busy to get to know me, or perhaps that they would already be too close, and wouldn't want an extra person in their group. But as the week went on and I slowly met more and more of my roommates, I realized I had been completely wrong in my assumption.

Everyone I met accepted me with open arms, and helped me adjust to life at HdB. After days of running around Kyoto doing various errands, I felt a sense of relief in coming home to HdB and saying hello to friends in the lobby, or having long conversations in the kitchen while making dinner. During our autumn trip to Hyogo prefecture, while we were sharing a meal together, dancing, and laughing, I remember feeling really grateful to be there. I had not felt that comfortable in a room full of people in a long time. There was not a single person

there who I felt I couldn't talk to. Despite our different backgrounds, I felt a deep sense of community with the people who surrounded me.

I think the secret to HdB working are the mindsets of the people who live inside it. All of us are from completely different walks of life, whether it be culture, language, religion, political views, age, etc. However, at the core of who we are, we all desire to meet people who challenge our own identities and beliefs. We want to learn about the world outside our own and the people who inhabit it. From experience, we all know that after you've breached that first cultural barrier, it is usually possible to make a connection with just about anybody. Even only using a few words in a shared language, you can make someone laugh, make someone smile, and make a new friend.

As human beings we are often scared of things we do not know. A person who is different than you in some way is a direct challenge to who you are. When we do not make an effort to get to know these people, we only contribute to misunderstandings, biases, and prejudice. By living in a community like HdB, you open your world view to so many other wonderful thoughts, ideas, and people.

Not everyone can afford to move to a new country and live in a community like HdB. You may think then, that our experiences are unique, and don't reflect your own. This is completely untrue. For example, in your neighborhood, class, or office, there are probably people with whom you have a different experience. Your colleague may have a disability, be a first generation immigrant, or be queer. They may be of a different religion than yours, or they may belong to an opposing political party. You never know the complexities of someone's identity until you ask and start a conversation.

And this isn't to say that building relationships with a diverse range of people is easy work. I come from a country of which the foundation was built upon the oppression of minority groups such as indigenous and African Americans. I not only share cultural differences with my black and indigenous friends, but I also lack the context to understand the pain, the trauma, and the anger that comes with their experience as people of color. The way to bridge that gap in our experiences is to listen and to be open to what other people have to say.

The conversations may not always be easy, and when you live in a community like HdB, you have to be open to these hard conversations. You have to be ready and willing to listen, and to have your beliefs challenged. But the reward for this work is invaluable. Once we can better understand each other, we not only close the cultural gap between ourselves, but also for our respective communities. When hearing about a foreign country on the news, you think not of the stereotypes you may have been exposed to in the past, but with your good friend from that place and the wonderful relationship you have. HdB is the kind of place that you have these experiences that open up your world view.

A few weeks ago, I had moment where I realized the impact HdB had had on me in the last two months. I had come home from a long day trip, thoroughly exhausted, and ready to go to bed. But I knew we were having a movie night and decided to stop by the lobby first. As soon as I walked through the doors and saw my friends, I immediately felt like I had come back home. That warm feeling, the familiarity, was something I never expected to feel so soon into my time in Japan. The kindness of my fellow residents, now friends, has given me strength to get through this transition into a new phase of my life. And for that, I will always hold HdB close to my heart in the future. I hope the lessons I learn here can help me through life in the future, as I work to build communities with people with whom I may have differences, but in reality are not too different from me after all.

## HdBいいね！

張 博訳文（中国）

京都大学

皆さんこんにちは、2020年後期入寮した張博訳文です。入寮してからわずか2ヶ月半も経っていない、まだHdBでの生活をなんでも新鮮に感じている私から、今日この場を借りて自分の留学ストーリーを皆さんにシェアします。そして、私が感じたHdBのいいところを伝えたいと思います。

私の出身地は中国東北部の遼寧省瀋陽市、中国の東北部にあり、関空から飛行時間2.5時間で着く所です。広い中国の中であまり知られていないかもしれません、人口は800万人ぐらいの都市です。写真に映っているように、瀋陽は中国の多くの北部にある都市と同じ、街の中には緑がほとんど見えなく、悪い環境です。そのため、とにかく樹木や緑に興味があって、農学部の森林科学科に志望し、平成28年の春京大に入学しました。大学院では、より環境問題を詳しく勉強したく、来年の4月から京大の地球環境学舎で修士課程に入ります。

留学生として一人で全く新しい環境に飛び込んで、生活に慣れるまで苦しんだり、友達を作るのが大変だったりする方が大多数だと思いますが、私はそのような辛い思いが全くなかったです。

高校卒業して日本にきた時、ビザの申請から飛行機のチケットの予約まで全部学校がしてくれまして、私たちは二つのクラス合計70人で、修学旅行気分で京都の伏見区にある日本語学校にきました。その後の半年間日本語の授業を受けながら受験しました。私の代では結局京大に12人が進学し、先輩たちから生活、勉強、バイトなどいろいろなアドバイスをもらえ、大学生活を始めるのに対して、全く心配がなく、とても心強かったです。

でも、せっかく日本に來たので、やっぱり日本人学生みたいな大学生活を送りたいから、体育会フェンシング部に入部しました。今から振り返ると部活に入ってほんとに良かったです。日本語が上達できたのも部活のおかげでしたが、もちろん辛い時もいっぱいありました。練習は週4回で、勉強する時間が足りなくて、授業でいい成績を取れなかつたり、夏休みには、友達みんな中国に帰って私だけが日本で合宿や大会で忙しかつたことがありました。当時、私は外国人として日本社会に馴染むため、日本人っぽくしなければならないと思いました。それが上手くできている人がたくさんいると思いますが、でも常に現地の文化や生活様式に合わせるのは簡単なことではありません。日本語がわかる、見た目はそんなに外国人ではない私にとって日本はとても住みやすい所ですが、大人になっていくうちにアイデンティティクライシスがやってきました。

ちょうど日本での生活にも慣れてきた時、新しい刺激を受けるために、三回生の後期にドイツのミュンヘン大学への交換留学に行きました。半年間の間で大きなことは何も起こりませんでしたが、知らないうちに人生が変わりました。学期前のドイツ語クラスと、後で参加した色んなイベントで世界中の友達だけではなく、初めて中国の他の地域の人とも友達になりました。みんな個性の強い面白い人で、このような多元な環境の中で私も「自分が誰なのか?」の答えがだんだんわかるようになって、自信を持つようになりました。このような生活がずっと学生時代で続けられたらいいなと思いました。

京都に戻ってきた後 HdB レジデントの部屋に遊びに行ったり、Common meal と Seminar にも参加したり、建物のスタイルがいいだけではなく、レンジデントの皆さんの仲良さを感じ、もし機会があれば是非ここに住みたいと思いました。

そして 10月1日から HdB に引っ越しして今日までの間で、Welcome party, Sports day, Common meal 3 times, Trip, Seminar, Halloween partyなどのイベントを経て、レジデントの皆さんとスムーズに仲良くなりました！私には、この短い間で HdB の良いところのいくつかが見つかりました。イベントを開催するのにちょうどいいレジデントの人数であること；キッチンやロビーでは毎日偶発的な会話ができること；普段のイベントが多く、みんなが集まる機会が増えること；House parents とコミュニケーションが全力サポートしてくれ、安心感があること；またみんな当番であり、それをやっている内にプロジェクトマネージメント力 が必ず身につけることなど。皆さん



図 1. 潘陽市内の様子



図 2. 参加した SDGs セミナー

HdBに入る理由は色々だと思います。私は入る前には友達を増やし、語学力を向上させたいと思いましたが、今の私はここに住んでるうちに是非リーダーシップを身に付けたいと思うようになりました。それは普段の学校生活ではなかなか習得するチャンスがないけど、HdBでは実現できるようになると信じています。

最後に、パンデミックが早く終り、日常生活に戻り、新しいレジデンスがたくさん入ってくるように祈ります。私も友達をHdBの楽しいイベントに誘いたいと思います。

私の話は以上になります、皆さんご清聴ありがとうございました。

## The track to capture the Japan and world through HdB

林奕愷 Lin Yi-Kai (台湾)  
(京都大学医学研究科医学専攻)

Before studying abroad in Japan, I never had the experience of staying long time in foreign country. Since 2018, spring, I began my 1<sup>st</sup> long-term staying in foreign country and the center of this story was surrounded by HdB. Being a PhD student, especially in medicine biology field, it was foreseeable that I would be busy in my experiments all day long. In addition to my research works, I also loved marathon this kind of long running event, so it was inevitable that I would spend a lot of time on training. But, one key person's coming drove my studying abroad life into this house, that guy is Judy Tsai, my younger classmate (大学後輩), who had lived in HdB for one and half year. With her strong suggestion, such as "If you want to enrich your studying life; if you wanna know more friends" "then HdB will be your good choice "said by her. I was ended up being persuaded to apply for HdB, and my wonderful PhD life was launched like this.

The first impressive thing for me when I moved in HdB is this house, unlike a typical dormitory but like club, or even small society. Why I was holding this thought? That is because we had many scheduled events to hold every semester, and every residents were required to take responsibility for one Toban job (当番). Besides, some residents were elected to form a Team, leading, and organizing our daily life and activities. When I was undergraduate, I used to live in university dormitory, the relationship between me and my roommate was just like "people living in same room", not mentioned to know other people living in next room or participate dormitory-held common activities. However, when I selected my first Toban job, doing it, and participated our scheduled events, joining house meeting, I began to feel here is not only the place for stay in but for experiencing group or even family life. So far, I have been living in HdB for almost 3 years, most of great memories are derived from the life in this house. For example, when I was living in my country, Taiwan, I had few changes to interact with foreigners, enjoy exotic culture. So, if I did not choose HdB

as my staying home, I would never have eaten such a lot of local and delicious foods made by different foreign residents in common meal events. If I did not choose HdB as my staying home, I would never have learned how to socialize with foreigners in the events such as dance party, Halloween party and Christmas party. All above experiences indeed expand my knowledge and perspective about other countries, most importantly, make me know how to be a qualified citizen in the era of globalization.

This semester (Autumn, 2020), I was elected as chairman of HdB and this job is still going on now, but I am very sure one thing, that is this working experience will occupy a very critical position in my heart. In the past, I used to serve as leader position, like captain of track and field team (陸上部). But unlike captain this work, being a chairman is much challenging than captain was. The main reason why I have this feeling is not only I need to cooperate with different foreign residents with distinct background, but also this year is quite special year compared with past ones. When I took chairman this position, we just went through the COVID-19 outbreak in Japan, many prefectures entered the emergency status for several months, then HdB reopened the scheduled events in autumn semester after the release of emergency order. Then the biggest difficulty ahead of us was how to organize the following HdB events in terms of the balance between maintenance of tradition and precautions against COVID-19. Because some residents were not so concerned about the risk of getting COVID-19 if we held indoor only events, but some residents thought we still needed more restrictions to prevent the occurrence of mass infection (集団感染). Regarding this issue, what I learned from this lesson is four things, to listen, to discuss, to review, and most importantly, to repeat these steps if we could not reach consensus. Ultimately, we got more people who agreed with our “new way” to hold our scheduled events. The above experiences, I think it will be very useful when I leave HdB, moving onto my career afterward. Having dispute over some issues is very common in our society, but without the ability to address it, that will get situation worse. So, after learning this ability, I am more confident that I can address any interpersonal and workplace problem in my left life.

Over the past 3 years, HdB give me many unforgettable memories, providing a super warm family for my studying abroad life. It is likely after getting PhD degree, I would leave Japan for searching my next career, such as doing postdoctoral job or applying for academic jobs. But what I truly believe is the connection between Japan, HdB and many friends I met here will never ended.



Maybe, like the OM meeting (OM 会)participants, my HdB friends and me will have our own OM meeting decades later.

## 国際社会で役だった “京都国際学生の家の経験”

嘉田 良平

(理事、四條畷学園大学教授)

京都国際学生の家 (HdB) で寮生として2年間過ごした貴重な経験は、疑いなく、その後の私の人生キャリアに大きな影響を与えました。その一端について、以下、略記しておきたいと思います。

とくに印象深かったことは、留学生の方々と寝食をともにする中で、日常的な交流を通じて異文化を学ぶことができたことです。HdBでのまさに多国籍の留学生の方々との日常的なコミュニケーションは、英語による会話力、コミュニケーション能力を格段に高めてくれただけでなく、無意識のうちに国際感覚を磨くことができたように感じています。多国籍料理と一緒に作る楽しさと食文化の奥深さを味わいながら、異文化交流への扉が開かれたのです。さまざまな共同作業を通じて、まさに文化の多様性への気づきが生まれ、さらには国際的な学びの機会が与えられたように感じています。

私の場合、HdBでの入寮生活の後、3年間のアメリカ留学の機会を得て、帰国後に京都大学に奉職することができました。幸い、京都大学では当初から国際関係分野の講義をいくつか行うとともに、率先して留学生の指導などを担当することができました。同時に、アジア諸国の大学関係者と共に数々の国際共同研究を行うことができました。多くの国際関係プロジェクトに従事できたのも、まさにHdBでの経験が生かされたからだと感謝しています。振り返れば、HdBでの生活体験はまさに私の研究者人生の起点になったと強く感じています。

では、なぜHdBの暮らしによって無意識のうちに国際感覚が養われるのでしょうか。そこでは、日々のHdBでの生活の中から、まさに寝食を共にすることから、知らず知らずのうちに国際的な感覚が身についているように思われます。原点となる“暮らし”がそこにあるからだと言えそうです。つまり、いろんな行事をともに経験したり、コモンミールや各種イベントなどの交流や実践を通して、無意識のうちに国際感覚が養われているのだろうと思います。

最後に、HdBの果たしうる役割と未来可能性について一言触れておきたいと思います。いま改めて感じるのは、HdBのもつ重要な役割として、他では得ることのできない不思議な国際的“出会い”という機会が提供されることではないかと思います。しかもその出会いは、生活基盤の上に成り立つ実践的な仕組みですから、形式的ではなく実質的な潜在力を持っているのです。HdBのもつこのような未来可能性について、今後、関係者あげて内外に積極的に発信していきたいと願っています。

## 【OM 便り】

つながっているということ

前川佳世子

(1997年 OM、元 HM)

いまでも大事なふたりの友だち。私たちが出会ったのは、HdB（以下ハウス）だ。当時モニカはハウスのゲストで道教の研究者、イタリア人。レジデントの関（かん）さんは中国人で中国の食物や喫茶文化の歴史を研究する大学院生だった。私も当時レジデントで、連日、調理師免許も持っているという関さんの手料理を3人で食べていた。関さんの作ってくれる中華料理は絶品で、3人でなごやかに、時には専門の話もしながら過ごす夜を私はとても楽しみにしていた。ここでの3人の公用語は中国語。モニカは中国に留学経験があり、私も大学時代第二外国語で中国語を勉強したり、何度か中国を旅行したりしていたので、中国語が一番都合がよかったからだ。関さんは、喫茶文化のことをたくさん教えてくれ、様々な中国茶を飲ませてくれた。モニカは道教研究の傍ら、童乩（タンキー）という台湾にいる靈媒師の映像を撮影しに出かけているようで、童乩の面白さを常々話してくれた。また、チベット仏教やボン教にもくわしく、そんな話は私を知らない世界に連れて行ってくれるようだった。

結局、私はハウスを半年で退寮し、1年半ほどの旅に出た。中国へ留学してきます！といいながら、北京や成都を起点に様々なところへ出かけて行った。中国では各地の中国茶をやまほど飲んだ。チベット（チベット文化圏はとても広い！）やインドのダラムサラへも行った。仏教にも興味があるので、インドやネパールの仏跡めぐりもした。そして、台湾に行き、これまたたらふくお茶を飲み、宗教的に不思議な出来事にも出会った。この経験がのちに大学院で童乩研究をすることにもつながるのだが…。

何でも見てやろうとあちこち放浪して、少し旅にも飽きたので帰国した。なぜかすぐ結婚相手にめぐり合い、結婚して京都を離れたので、モニカと関さんとはそのあと一度会ったきりだ。関さんはその後中国に帰ってしまい、久しぶりに来日した時に連絡してくれ会うことができた。モニカにも一度会えた。そのころのモニカは京大の人文研で研究していて、とても充実しているようだった。2011年の春、家で急にモニカの顔が浮かんできたので、インターネットでいまどうしているか調べてみた。

[Wikipedia](#)には、誕生日の反対側に年月日が書かれていた。モニカはもうこの世からいなくなっていた。

モニカ、私はあの時話してくれた、チベットに行きました。そこでいろんなものを見ました。結局台湾へ童乩や道教寺院の調査にも行って、論文も書きましたよ。どれ

もこれもハウスでの出会いがなかったら、やっていないこと。モニカに出会わなかつたら、いまは別のことをしていたかもしれないね。

レジデントだった私も少々年を取り、京都に戻ってきていて、2006年ハウスマザーになった。私がレジデントだった時の戸口田夫妻(当時のハウスペアレンツ)は、きりつとしていて、かっこよかったが、私は準レジデントみたいな頼りないハウスマザーだった(と思う)。だからか、いつもレジデントやゲストにいろいろ教えてもらい、自分自身も相当楽しんで、ハウスの生活を再び満喫した。びっくりすること、うれしいこと、どきどきすることいろいろありましたね(その頃の皆さん!)。みんな素敵な人たちで幸せな日々だったなあ。

そのなかのひとりMさん。彼女は入寮面接の時の座右の銘が「義理と人情」で、実際生活してみるとそれをお言実行する人だった。ほんとうに「義理と人情」に生きていた。私の座右の銘は昔から「棚から牡丹餅」だったけれど、いまでは「義理と人情」ということにしてる。ちょっと頼まれごとがあったとき、「義理と人情!」という言葉を思い出して、えいやっ!と受けてみたりするようにしている(無理のない範囲で)。

人の生活は、そんなこんなでなんとなくスパイラル状につながっていて、あとで考えてみると、あのときのこんなことが、こんなことに!ということに気がつく。

いま私は日本語教師をしている。この仕事を目指したのは、ハウスの一見お世話しているようで、教わることばかりだった日々をまた味わいたいと思ったからかもしれない。いまの私の願いは、日本に来てくれる皆さんに日本を好きになってもらいたいということ。言葉を学んで、日本で生活して、春夏秋冬の、朝昼晩の景色や匂いや音をたっぷり感じてほしい。この国での生活が後からよい思い出になりますように。

あちこち話が飛んでしまったが、こうした豊かな時間を与えてくれたハウス、ハウスで出会った方々に感謝しています。そして、いつまでもハウスが存続し、多くの学生さんにこのような場所が提供され続けますように。応援しています。

## HdB 創立 55 周年記念に寄せて

置田 和永  
(1973 年 OM)



2016/4/21 ミャンマーでの除幕式

り、自身の終活として HdB 学生時代から関心のあった『戦争と平和』をテーマにして、東南アジアを旅して戦中・戦後に建立された戦没者慰靈碑を尋ね歩く中で、多くの出会いがあり、とりわけアジア太平洋戦争中にタイからミャンマーへと敷かれた旧泰緬鉄道の歴史を国内や現地で検証し、実はまだミャンマーでも政府と少数民族にはイギリスの植民地時代に形成された覇権国の分断統治政策の後遺症が続き、先人の遺骨収集でさえもままならぬ現状を知り、アジア太平洋戦争がまだ終わっていないことに改めて気付かされました。

日本人は、アジア太平洋戦争の加害者でもあり、また被害者でもあります。そこで日本人の一人として忘れ去ろうとしている日本の近現代史を検証し、少しでも現在の日本人の平和主義を世界に広めようと、自身の終

私は40数年前に HdB を巣立ってから教職の道を歩み、HdB の体験を生かして文部科学省の海外派遣教員として、イイ戦争下の中東イラク・バクダッド、そして大東亜戦争として未曾有の犠牲者を出し、インパール作戦の足跡が残っている東南アジア・ミャンマーの 2 か国、計 6 年間の海外生活をしてきました。そして現在、高齢者にな



1943 年頃の鉄道工事現場の様子

活として旧泰緬鉄道の終着駅だったミャンマー・モン州タンビュザヤと基幹駅だったタイ・カンチャナブリの 2 カ所に世界平和の塔を建てるプロジェクトを数年前に立ち上げました。建立するまでには、いろいろな難問もありましたが、岐阜市大洞願成寺光輪会や日本ミャンマー友好協会の皆様のご賛同、特に HdB 時代からのミャンマーやタイの友人達からの支援を受けて、2016 年 4 月 21 日、ミャンマー・モン州タンビュザヤにできたばかりの泰緬鉄道博物館に、また

2017年11月29日、タイ・カンチャナブリのJEATH WAR MUSEUMの2カ所に世界平和の塔を無事完成させ、現地の人たちも交えて除幕式を終えることができました。



タンビュザヤに残る鉄道工事犠牲者の日本寺供養塔  
英・豪・蘭・米の戦争捕虜も  
鉄道建設工事労働者として働きました。しかし、当時の日本軍には、すでに鉄道建設のための必要な機材は不足、1万2千人足らずの日本軍鉄道隊員の指揮による人海戦術しかありませんでした。また食糧や医療品の不足等、工事現場では劣悪苛酷な日常生活も待っていました。加えて3密がまったく保証されない仮宿舎にて、マラリア・コレラ・チフス・デング等の伝染病や風土病が大流行し、戦闘以外でも未曾有の犠牲者が出てしました。よって戦後になって泰緬両国にできた鉄道博物館は、  
DEATH RAILWAY MUSEUMと命名されるほど、悲惨な歴史として刻まれました。(一方、そのDをJAPANのJにした旧泰緬鉄道博物館もできました。→)

そして戦争末期、日本国本土では、すでに全く制空権を失っている中、すべての都市は無差別空爆で破壊し尽され壊滅状態になり、

その最期は広島と長崎に原爆が投下され、戦争になんら罪もない数十万人を超える多くの市民が犠牲となって、やつと日本国は無条件降伏を受け入れ終戦となりました。そして内外で多くの戦争犠牲者を出したことによってはじめて、戦争では何の幸せももたらされないと思い知らされました。幸いにして戦後数年間占領軍に統治はされたものの、1951年には世界の多くの国々の理解を得て、サンフランシスコ講和会議にて独



カンチャナブリ JEATH WAR MUSEUM

立を果たし、その後わずか20年間で先進国の仲間入りするほどの経済発展を遂げました。

しかし、現在の世界は過去の世界大戦の教訓から学ぶことなく、また平和を軍備拡張や戦力によって維持解決しようという論理がまかり通っています。現実的には自国を防衛することや集団的自衛権は国際法では認められ世界的常識になっていますが、残念ながら大国の霸権主義や各国間の疑心暗鬼の中で決して楽観できない情勢にあります。そこでは同じように何の罪もない一般市民が犠牲になり、その憎しみが憎しみを連鎖増幅させ、各国各地で悲惨なテロ事件も頻発しています。

私は近現代史を検証していく中で、実はこれまでの戦争や紛争には、その根幹に人間が持つ偏見差別があることに気付かされました。

日本は第一次世界大戦後のパリ講和会議に於いても、またアジア太平洋戦争中に東アジア主要国の代表が東京に集まり出された大東亜会議共同宣言に於いても、日本か



ら一貫して人種差別の撤廃が提案されました。そこで私たちは、仏教の教えでもある差別のない自他平等の精神を広めようとタイのカンチャナブリ市ワットチャイチャムポン寺院のご高配により、境内にあります JEATH WAR MUSEUM の傍を流れる大河メイクロン川のほとりで日泰の僧侶による読経を通して、『世界平和の塔』の除幕式を終えました。

このようにタイ側でも平和の塔『自他平等碑』の建立がつつがなくできたのは、40数年前にHdBで出会い、当時ベトナム戦争等、混沌とした世界情勢の中で青春時代を共にし、終生の友となったクリサダ氏（写真左・京都大学工学部博士課程修了）の協力があったからこそです。そして昨年、彼が十数年前にバンコクに創立した泰日工業大学和太鼓クラブの学生を岐阜に招き、岐阜の和太鼓サークルとの交流会をし、岐阜観光も堪能していただきました。また、現在の私の終活は、HdBで学んだ友愛の精神で、海外日本人学校勤務でお世話になったミャンマーの青年達の日本留学等への道と来日後の彼らの自立支援を続けています。そして自宅の近くのアパートにHdBの『出会いの家』という名前を付けて、アジア留学生らの憩いの場所になるようにとささやかな活動も始めています。思えば私のHdB時代は創立10周年記念にあたり、当時HdBロビーにて盛大に行なった記憶がありますが、HdBが創立55周年記念を迎えるにあたって、HdBを巣立って行った寮生が未永くこれからも世界平和の礎となり、世界平和に貢献して行ってくれることを切にご期待致します。

# リスク拡大時代の食と農のゆくえ

嘉田良平  
四條畷学園大学教授

2020年は新型コロナウイルスによる未知の感染症の登場によって、私達の社会経済活動も日常生活も、これまでごく普通に当たり前だとされてきたことが制約されるなど、大きな変化も起き、まさに大きな節目の年となった。そこで以下では、わが国の食料と農業にとって今回のコロナウイルス禍がどのような影響を及ぼし、私達に対応を求めているのかについて考察したい。

## 1. 食の国際化と食品安全問題

規制緩和と農産物貿易の自由化の進展によって、「食」のグローバリゼーションは日本の食卓に様々な影響を及ぼし、とくに2020年は、各地で洪水、大水害など自然災害が多発し、また、新型コロナウイルス感染症という予期しえぬリスクの拡大によって、国民生活が大きく揺らぎ、農業経営面でもさまざまな影響が生じることになった。

本来、食生活あるいは食文化そのものは、それぞれの国や地域（あるいは民族）ごとに固有のもので、不变性・持続性が強いとされる。それは気候や風土条件に強く影響を受け、地域に適合する農作物によって伝統的にはぐくまれ、世代を超えて受け継がれるからである。とくに食品安全にかかわる問題は、O-157やBSE（いわゆる狂牛病）問題に象徴されるように、近年、世界各地で多発し、国内はもとより国際的にも大きな社会問題となってきた。こうした中、国民の食に対する不安感、不信感はますます強まってきた。いかに日本の消費者が食料・食品の安全性に敏感に反応するようになったか、また、輸入食品が氾濫する中で日本の食品安全に関わる管理体制や関係企業の危機管理がいかに不十分であるかが問われているのである。

ここで注目すべきは、農産物・食品の安全を問う対象や範囲が拡大してきたことである。これまで食品安全の問題は、一企業あるいは一地域内における衛生管理や調理過程でのトラブルが主な原因であった。しかし今日では、加工・流通・消費の全プロセスが対象となり、さらには生産段階や貿易面までもがその責任を問われるに至っている。まさに、食のグローバリゼーションという国際性を帯びた大きな構造変化の中に食品安全問題が組み込まれ、その問題解決を迫られるようになってきていることを忘れてはならないのである。

私たちが築きあげてきた20世紀の高度消費文明は、たしかに非常に効率的で便利であったが、資源・環境破壊に加えて、地球温暖化というとてつもない負の遺産を作り出してしまった。非持続的・非循環型のシステムは、工業のみならず農林水産業においても同様である。

同様に、エネルギー効率（農業生産に投入されるエネルギーと算出エネルギーとの比率）が極端に低下してきた日本の農業システムをこのまま放置することは許されないであろう。循環型社会の実現に向けて、農林水産業や食品工業から排出されるバイオマス資源をいかに有効利用するかという点も私たちに課せられた重要な課題である。

世界の食料安全保障や地球レベルでの環境問題に着目すれば、わが国の食と農をこのまま放置することはできない。食料安全保障は日本にとって緊急かつ重要な政策課題であるが、地球環境変動、バイオマスエネルギー問題そして食品リスクという観点から早急に見直すべきであろう。

## 2. コロナショックと農業のリスク管理

2020年、新型コロナウイルス感染拡大で一時的にせよ、国際的なサプライチェーンが崩壊し、食料需給にも重大な影響が生じた。こうした中、最も頼りになるのはやはり国産農産物である。今こそ自給率向上と安全・安心を両立したリスク管理を図り、食料安全保障体制を見直すべき時だと思う。

新型コロナウイルス感染拡大の下では、市場メカニズムは十分機能しないことが明らかとなった。グローバル化が進む中、各国が輸出制限に踏み切り、国際的なサプライチェーンが完全にストップしてしまったからである。その結果市場メカニズムは機能不全を起こし、生産・流通・消費のあり方が大きな変革を迫られることになった。恐らくウイルス感染収束後も様々なリスクが高まるとの予想から、各国は国内生産を優先させる方向へシフトするであろう。

注目したいのは、新型コロナウイルスという未知の感染症は、一瞬のうちに世界各国に拡散し多くの命を奪ったこと。そして、これがグローバル経済拡大の結果として生じたという事実である。さらに、都市化および人口の集中化が生態系の破壊を伴い、感染症被害を大幅に拡大させてきたという点も忘れてはならない。

都市化の進展は野生生物の生息地を奪い、野生動物と人の接触機会を増やしてきた。これが新型コロナウイルスの元凶となっていることを知るべきであろう。新たな感染症の登場は、ある意味で環境破壊を続ける人類に対する警鐘と受け止めるべきではなかろうか。対極的に、農村部は人口が密集せず豊かな自然環境を持つことが再認識されたようだ。

では、これまでの市場システムに代わる新たなシステムとは何であろうか。今回のコロナショックにおいて、人と人のつながり、地域内における助け合いが大きな支えとなった。それは、農村の伝統である「協働、共助、共生」という従来の市場メカニズムとは対極的なシステムであり、農業が長い歴史の中育んできた価値である。実際、ウイルス感染が拡大する最中、各地で様々な協働と支え合いの取り組みが行われ、人々の共感を得たことが報告されている。

今回のコロナショックの中で、地産地消の重要性と農業・農村の価値がキーポイントとなったことを強調したい。そこで、農業の現場では何が起き、農業界はどのように対応したのか振り返っておこう。いくつか興味深い現象が明らかとなったが、特に

深刻な経済的落ち込みの影響を被ったのは、飲食店や旅館業界である。そして、農業界もまた感染リスク対応を迫られることになった。

観光客が激減し旅館や料亭などは不振となり、高級食材の売れ行きは完全に止まってしまった。他方、巣ごもり消費として生鮮食品が伸びず、ストック可能なカップ麺等のまとめ買いが横行した。あるいは、長引く小中学校の休校措置によって給食が停止し、牛乳や野菜など一部農産品の売れ行きが大幅に低下したことなどが各地で起きた。

### 3. 農業・農村の価値を見直す好機

これまで輸入に依存していた農産物流通がストップし、外食等の業務需要も大きく減少した。さらに外出自粛措置や諸外国の国境封鎖措置による訪日インバウンド客の激減等、農産物・食料における観光需要も激変して多くの食材が値崩れを起こした。

このように、世界の食料貿易システムが大きく崩れ需給構造が変化する中、国民の胃袋を国際市場に依存できなくなるとともに、国内生産が優先されるのは当然であった。今回のコロナショックが拡散する中で、一つの大きな成果は「国産農産物こそ大切な一番頼れる存在」ということを国民が再認識した点である。

もう一つ国民が再認識することになったのは、農業と農村の価値あるいは役割ではなかろうか。ウイルス感染者は、東京・大阪・札幌という大都会に集中して発生した。大都会における感染リスクの大きさに比べ、農山村の方がはるかに安全であり安心できる空間であることを、国民は再認識することになった。農村の健全さと安心感は、「コロナ疎開」という新語を生み出したことからも明白であろう。

感染症の蔓延、世界人口の増加、頻発する異常気象の影響などを考慮すれば、世界の食料安全保障の行方はまったく予断を許さない。それゆえ、過去最低の37%と低迷している食料自給率を少しでも向上させることは、不可欠の課題として改めて浮かび上がってきた。グローバル化は、やはり大きなリスクと隣り合わせであることを知るべきであろう。

これまでの様々な感染症の歴史を振り返れば、新型コロナウイルス感染症の新たな波は必ず訪れるであろう。また、類似の感染症が次々と登場するということを想定しなければならない。今後とも感染リスクが起きるであろうという想定の元に、食料と農業安全保障は構築しなければならない。農業分野におけるリスク管理は、自然環境や社会条件の違いによりそれぞれの地域毎に対応せざるを得ない。しかも、農業には洪水や土砂災害という自然災害を起源とする災害も同時に想定しなければならない。

自然災害も感染症のリスクも、ともにゼロにすることはできない。ゼロリスクはありえないからである。大切なのは、日常の肥培管理や農作業の中で、リスク管理の仕組みをきちんと位置付けておく必要がある。コロナ禍によって市場環境が激変する今こそ、そして私たち消費者の求める食の安全・安心に応えるためにも、それぞれの足元からの総点検が求められている。

## ミャンマーの軍事クーデターに思う

内海 博司  
(HdB 理事長、京都大学名誉教授、19650M, 元 HF)

YEARBOOK の編集段階に入った 2021 年 2 月 1 日、ミャンマーで軍によるクーデターが発生した。天安門事件のように海外でデモをした優秀な留学生が亡命を余儀なくされることが再び起きるかと思うと、長く留学生を見てきた者として悲しい報道である。

本誌の 19 頁に、カナダから OM の Tom Myint 氏から「稻垣夫人へのお悔やみのメール」が掲載されているが、彼はミャンマーがビルマと呼ばれた時代の留学生で、京大工学部のマスターを取得後、母国で役立てようと意気込んでいたにもかかわらず、国が軍人独裁政権となり軍人籍以外は重要な職に就けない状況を知り亡命した経緯がある。また 50 頁には OM の置田和永氏が定年後 10 数年、ミャンマーの教育や平和活動に取り組まれた話が掲載され、民主化が大きく進んだミャンマーの明るい未来が期待されていただけに、彼らの努力が水泡に帰さないことを祈るばかりである。

軍の独裁から民主政治への大転換が期待された昨年（2020 年 11 月 8 日）に執行されたミャンマー連邦議会の総選挙で、与党・国民民主連盟（NLD）が前回の 2015 年の選挙を上回る 396 議席を獲得し、改選議席 476 議席のうち 8 割以上を占めた。この総選挙の実施については、新型コロナウイルスが大流行している最中の執行となつたため、国軍系の野党・連邦団結発展党（USDP）の「国民の安全が確保されない」という理由で、街頭演説も制限されていた。また多数のロヒンギャは不法移民として選挙権が認められず、少数民族政党が地盤とする一部地域の投票も治安上の問題を理由に取り消される等、100 万人以上の投票権が剥奪されていた状況での総選挙であった。国際社会からは総選挙自体は平和的に行われたと評価される一方、恣意的な投票取り止めが批判されるなど、選挙の公正性をめぐって懸念の声が挙がっていた。そのような状態の中での総選挙で、国軍と USDP が大きく敗北した。国軍と USDP からは、総選挙に不正があったとした抗議もあり、軍の支持者からも選挙の調査を求める声が挙がっていた。2021 年 2 月 1 日午前、ミャンマー国軍は、与党・国民民主連盟（NLD）党を率いるアウンサン スーチー国家顧問（75）らを拘束し「軍が国家の権力を掌握した」と宣言して、クーデターを行った。ミャンマー国軍は、ミン・アウン・ラーウィン国軍総司令官が政府トップになると発表し、今後 1 年間にわたる国家非常事態宣言を行った。これに対してアウンサンスー氏は、拘束に先駆けて用意した書簡で、国軍の行動はミャンマーを独裁国家に戻すものだと批判し、支持者に対して、この事態を「受け入れず、クーデターに抗議」するよう呼びかけて、現在に至っている。国軍のクーデターに対する抗議行動に対して、治安当局（警官隊）が大規模な弾圧に踏み切るなか、市民が街頭に繰り出し、デモが続けられている。一方、国際社会は市民に銃口を向け、多数の死傷者を出した治安当局を容認しない姿勢を強調して、国軍に対する圧力を強めており、欧米による制裁が強化される可能性も高まっている。

## 【資料】

### 公益財団法人京都国際学生の家 役員等

#### 監 事 (2020 年度)

浅 田 拓 史 (大阪経済大学准教授、公認会計士)  
折 田 泰 宏 (弁護士)  
秋 津 元 輝 (京都大学教授、OM 会員)

#### 評議員会 (2020 年度)

岩 崎 隆 二 (和晃技研㈱代表取締役社長、OM 会員)  
中 島 理一郎 (元同志社大学教授、OM 会員)  
吉 田 和 男 (京都大学名誉教授)  
西 尾 英之助 (京都日独協会会长)  
平 野 克 己 (日本塗装機械工業会専務理事)  
鳴 田 正 人 (鳴田内外国特許事務所代表、弁理士、OM 会員)  
諫 訪 共 香 (元立命館大学講師)  
山 田 祐 仁 (辻調理師専門学校、学寮運営委員長、OM 会員)

#### 理事会 (2020 年度)

##### 理事長

内 海 博 司 (京都大学名誉教授、元 HF、OM 会員)

##### 常務理事

吉 川 晃 史 (関西学院大学准教授、公認会計士)

##### 理 事

上 村 多恵子 (京南倉庫㈱代表取締役社長)  
村 田 翼 夫 (筑波大学名誉教授、OM 会員)  
嘉 田 良 平 (四條畷学園大学教授、OM 会員)  
吉 村 一 良 (京都大学教授、元 HF、OM 会員)  
RUSTERHOLZ Andreas (関西学院大学文学部教授)  
深 海 八 郎 (眺八海俱楽部総支配人)  
永 井 千 秋 (公財) 新産業創造研究機構 技術アドバイザー、  
OM 会員)  
村 上 彩 (㈱グローバルエージェンツ、HM)

HF :House Father  
HM :House Mother  
HC :House Committee  
OM :Old Member

## 顧問 (2020 年度)

所 久 雄 (社会福祉法人京都国際社会福祉協力会理事長)  
神 田 啓 治 (京都大学名誉教授)  
平 松 幸 三 (京都大学名誉教授、OM 会員)  
森 棟 公 夫 (楫山学園理事長、京都大学名誉教授)  
柴 田 光 藏 (京都大学名誉教授)

## 学寮運営委員会 (HC) (2020 年度)

### 運営委員長

山 田 祐 仁 (辻調理師専門学校、OM 会員)

### 運営委員

坂 口 貴 司 (三菱電機株、OM 会員)  
鈴 木 あるの (京都大学講師)  
TANANGONAN Jean (近畿大学講師、OM 会員)  
DAVIS Peter (Telecognix Corporation CEO)  
戸口田 淳 也 (京都大学教授、元 HF 、OM 会員)  
松 橋 眞 生 (京都大学学際融合教育研究推進センター  
健康長寿の総合医療開発ユニット、元 HF)  
長谷川 真 人 (京都大学教授)  
北 島 薫 (京都大学教授、元 HM)  
崔 英 樹 (京都市青少年科学センター職員、OM 会員)  
金 広 文 (京都大学准教授)

CHAIRPERSON of TEAM

VICE CHAIRPERSON of TEAM

## 職員 (2020 年度)

水谷内 典 子  
清 水 良 子  
吉 竹 慶 一

## 2020 年度 補助金・寄付金・その他ご支援

2020 年 1 月 1 日～2020 年 12 月 31 日受領分

敬称略

### 補助金・助成金

令和元年度京都市外国人留学生交流等促進事業補助金	
・「食文化を中心に据えた交流事業」	計 660,630 円
・「異文化学習とスポーツを通じて交流を深める事業」	
・「SDGs 促進に向けた国際学生の家による映像制作と実践型イベント開催」	
・「会誌発行（イヤーブック）」	
『(公財)中島記念国際交流財団助成』(独)日本学生支援機構留学生地域交流事業	
・「国際理解を促進する公開市民講座およびセミナーの実施」	219,691 円
・「食文化を中心に据えた国際交流と混住型留学生寮の意義」	177,817 円

寄付金（使途指定なし）計 6,068,000 円

寄付者	寄付者	寄付者	寄付者
協和化学工業株式会社	㈲ハイナン 土屋 俊宏	花伝 西村清子	京都ロータリークラブ
有限会社エムティーエヌ 青木みどり	岡崎白川ライオンズクラブ	福田金属箔粉工業 株式会社	サンこども園吉川昭一
ファステック株式会社			

CHANG CHEW CHIN	Hofmann, Onno Jakob	HUANG, Yin-Hsuan	Trin Hai
TUDEU KHONGORZUL	WELSH Richard Louis	朝倉 寛之	新居 哲
石原 ゆき子	伊藤 康宏	井上 勝六	井上 富子
岩崎 隆二	岩田 忠久	岩沼 省吾	上田 高廣
上田 学	上西 勝也	内海 匡人	内海 博司
大鹿 康廣	大畑 浩志	岡田 徳子	岡本 徳子
小野 公二	金 盛彦	加藤 哲雄	鎌野 幸子
鴨田 昭代	川野 家稔	河野 大輔	河南 晴子
カンタトーレメンコ	木原 文太左右衛門	窪田 弘	小暮 智一
琴浦 良彦	小西 淳二	木葉 丈司	近藤 敬司

坂野 泰治	澤田 正樹	シエイエイ	杉山 喬一
鈴木 喜六	鈴木 武夫	鈴木 松郎	諏訪 共香
高田 徳子	竹田 洋子	多田 謙治	田中 徳壽
谷 幸治	田野 かおり	辻 正樹	辻村 富子
土居 貞往	十河 智江子	富永 芳徳	友松 浩
永井 千秋	中上 和子	中島 理一郎	仲谷 正博
中谷 和夫	中山 貴美子	成田 康昭	西尾 英之助
西川 清子	西本 太觀	丹羽太貫	平田 康夫
平野 克己	深海 八郎	福本 和久	藤原 邦夫
古川 彰	古川 千佳	細川 治	眞木 恵子
松田 敬一	三浦 一郎	水野 明代	美濃 導彦
村崎 直美	村田 翼夫	森田 敏照	森棟 公夫
安田 佳子	柳田 由紀子	薮下 義文	薮田 定男
山岸 秀夫	山下 進一	山田 有信	山田 祐仁
山本 慶一	山本 夏子	山本 雅英	義家 敏正
匿名 5名			

寄付金（研究者棟新築と本館耐震補強・改修工事費用に使途指定）：総計 135,000 円

寄付者	寄付者	寄付者	寄付者
稻葉 カヨ	内海 博司	岡田 徳子	清水 安代
辻 正樹	橋本 求	古田 和子	山口 忠彦

#### 寄贈品・その他

青木 みどり	白米・玄米
折田 泰宏	ジャム・オリーブオイル
置田 和永	柿

皆様のご支援に心より感謝申し上げます。

\* 2021年1月以降のご寄付分は、次年度の報告書に記載させていただきます。

## 公益財団法人京都国際学生の家の略史

西暦 和暦	ハウスペアレンツ		事項
	日本	スイス	
1961 S36			<ul style="list-style-type: none"> <li>・1月21日--スイス東アジアミッション(SOAM)コーラー牧師構想の「出会いの家」を京都に実現するための募金活動開始(於チューリッヒ)</li> <li>・11月19日--第1回京都「国際学生の家」建設発起人会</li> <li>・3月24日--第1回京都「国際学生の家」建設実行委員会</li> </ul>
1962 S37			
1963 S38			<ul style="list-style-type: none"> <li>・6月--SOAMとHEKSより67万スイスフラン(邦貨約5,560万円)の寄付</li> <li>・12月16日--財団法人京都「国際学生の家」設立</li> <li>・12月16日--理事長湯浅八郎博士就任</li> <li>・12月16日--財団法人京都「国際学生の家」寄付行為制定</li> </ul>
1964 S39			<ul style="list-style-type: none"> <li>・8月10日--学寮建設工事契約; 槻竹中工務店、総額約8,700万円</li> <li>・8月中旬--地鎮祭</li> <li>・10月14日; 寄付金(一般)の免除対象となる試験研究法人等として承認(4教文第388号・京都府教育委員会委員長)</li> <li>・12月25日--財団法人京都「国際学生の家」規約制定</li> </ul>
1965 S40	4月:稲垣 Inagaki	4月:トマムート Dumermuth	<ul style="list-style-type: none"> <li>・3月31日--竣工</li> <li>・4月1日--開寮</li> <li>・4月10日--献堂式</li> <li>・10月頃--ハウス・チーム誕生</li> </ul>
1966 S41			
1967 S42	3月:中山 Nakayama		<ul style="list-style-type: none"> <li>・4月10日--学寮開寮一周年記念式典</li> <li>・12月20日; 寄付金(一般)の免除対象となる試験研究法人等として承認(雑文第1の28号・文部大臣)</li> </ul>
1968 S43			
1969 S44	4月:内田 Uchida	5月:ヘンガー Pfenninger	<ul style="list-style-type: none"> <li>・12月16日--西館完成</li> </ul>
1970 S45	7月:不在		
1971 S46	4月:大沢 Ohsawa	4月:ベア Bär	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2月18日--年報第1号発行</li> </ul>
1972 S47		3月:ケッター Kötter	
1973 S48	6月:内海 Utsumi		<ul style="list-style-type: none"> <li>・財団法人万博協会より資金を受け、屋上改修工事</li> </ul>

1974 S49	50	4月:内田 Uchida 12月:ハットナム Putnum	•4月1日--財団法人京都「国際学生の家」諸規則の改正 •5月18日--十周年記念式典 •5月1日--年報『出会い』第2号「十周年記念号」発行
1975 S50			
1976 S51			
1977 S52			•6月24日--「ライオンズ基金要綱」を制定 寄付金総額1,340万円を基本財産に組み入れ 昭和50年度・51年度のライオンズクラブ(京都27クラブ)よりの寄付
1978 S53			
1979 S54			
1980 S55		3月:琴浦 Kotoura	
1981 S56			•8月15日--初代理事長・湯浅八郎博士逝去
1982 S57			
1983 S58	9月:古川 Furukawa	2月:ブルコルター Burkolter	•1月31日--第2代理事長に上野直蔵博士就任
1984 S59			•8月21日--創始者・ウェールナー・コーラー博士逝去 •10月2日--第2代理事長・上野直蔵博士逝去 •10月26日--第3代理事長に遠藤彰氏就任
1985 S60		3月:不在 Utsumi	•3月8日--年報第8-9号「二十周年記念号」発行 この年にHdBのエンブレムの制定 •10月1日;国際交流基金の第1回国際交流奨励賞地域交流振興賞受賞 •10月19日--創立二十周年記念式典
1986 S61			
1987 S62			

1988 S63		4月:フォレンハイマー Vollenweider	・1月18日--財団法人京都「国際学生の家」諸規則の整備 ・5月28日--財団法人京都「国際学生の家」パンフレット作成 ・10月15日--京都市より表彰
1989 S64 H1			・7月2日--第1回国際食べ物祭り開催 この年にHdBの旗を制定
1990 H2	8月:山本 Yamamoto	4月:オッテ Otte	・3月31日--第3代理事長・遠藤彰氏辞任(広島女学院大学学長就任) ・4月1日--第4代理事長に稻垣博博士就任
1991 H3			
1992 H4			
1993 H5	4月:吉村 Yoshimura		
1994 H6	3月:ヴァイダー Wider		
1995 H7			・7月8日--創立三十周年記念式典(SOAM会長他5名来日、出席)
1996 H8	4月:戸口田 Toguchida		
1997 H9			
1998 H10			
1999 H11	4月:高橋 Takahashi		12月31日--SOAMとの法的関係解消、ハウスファーザー二人制廃止
2000 H12	1月:以降、廃止		・9月6日--財団寄付行為の改正
2001 H13			・3月下旬--全職員の退職・全寮生の退寮 ・4月初旬--大改修工事開始 ・8月末日--工事完工 ・9月1日--再開館、新職員採用 ・10月21日--再開館祝行事開催

2002 H14	8月:木戸 Kido		
2003 H15			
2004 H16			
2005 H17			
2006 H18	4月:前川 Maekawa	ハウスアドバイザー 10月:ブアデン Buadaeng	
2007 H19			<ul style="list-style-type: none"> <li>・1月20日--第4代理事長・稻垣博博士逝去</li> <li>・5月20日--第5代理事長に内海博司就任</li> </ul>
2008 H20			<ul style="list-style-type: none"> <li>・11月17日--稻垣先生を偲ぶ会</li> </ul>
2009 H21			<ul style="list-style-type: none"> <li>・7月10日--第2代ハウスマザー・ネリー・コーラーさん逝去 (創始者・ウェルナー・コーラー夫人)</li> </ul>
2010 H22	8月:松橋 Matsuhashi		<ul style="list-style-type: none"> <li>・7月17日--第3代ハウスマザー・ペニンガー好美さん逝去</li> </ul>
2011 H23			<ul style="list-style-type: none"> <li>・2月12日--石井米雄理事逝去</li> <li>・6月30日--田村武理事逝去</li> <li>・9月3日--西島安則評議員逝去</li> <li>・11月6日--創立四十五周年記念式典</li> </ul>
2012 H24			
2013 H25			<ul style="list-style-type: none"> <li>・3月31日--公益財団法人移行申請</li> </ul>
2014 H26	6月:北島 Kitajima Phillips		<ul style="list-style-type: none"> <li>・4月1日--公益財団法人認可</li> <li>・10月31日--第1次耐震審査実施(本館)</li> </ul>

2015 H27		・3月30日--寄付金税額控除認可
2016 H28	3月:飯田 Iida Hidding	・11月7日--創立五十周年記念式典 ・5月31日--第2次耐震審査実施(本館)
2017 H29		・3月--本館耐震・リフォーム案、西館立替案作成 ・9月27日--募金委員会発足 ・10月1日--募金趣意書作成
2018 H30		
2019 H31 R1	3月:崔 Choi	・2月26日--第1期工事・募金趣意書作成 ・6月8日--第1回同窓会(OM会)公開講演会、総会の開催
2020 R2	4月:村上 Murakami Verma	・4月～6月;耐震工事及び排水管交換工事、運動場を第2駐車場に変更 ・4月～9月まで、コロナのパンデミックでHdBの活動休止 ・7月29日--初代ハウスマザー稻垣和子さん逝去 ・12月12日--第2回同窓会(OM会)公開講演会、総会開催

## 公益財団法人京都国際学生の家利用者の集計

### ● 学生の部（レジデント）

国籍別利用者実数

1965年4月から2021年1月までの合計 83ヶ国 1045名

アフガニスタン	6名	コロンビア	1名
アメリカ	46名	コンゴ	1名
アルゼンチン	3名	コートジボアール	1名
イギリス	12名	ザイール	1名
イスラエル	1名	シンガポール	18名
イタリア	5名	ジンバブエ	1名
イラク	3名	イスス	12名
イラン	13名	スウェーデン	3名
インド	20名	スーダン	1名
インドネシア	26名	スペイン	1名
ウガンダ	1名	スリランカ	11名
ウズベキスタン	2名	セネガル	1名
エジプト	7名	タイ	42名
エストニア	2名	台湾	27名
エチオピア	2名	タンザニア	4名
オーストラリア	2名	チェコスロバキア	4名
オーストリア	1名	中国	62名
オランダ	12名	朝鮮	4名
カザフスタン	1名	チリ	3名
ガーナ	1名	ドイツ	45名
カナダ	4名	ドミニカ	1名
韓国	51名	トルコ	12名
カンボジア	13名	ナイジェリア	3名
キプロス	1名	日本	339名
キルギス	1名	ニュージーランド	7名
グルジア	1名	ネパール	6名
ケニア	6名	ノルウェー	4名
パキスタン	6名	ホンジュラス	1名
ハンガリー	6名	マリ	1名
バングラディッシュ	5名	マレーシア	23名
フィリピン	16名	マダガスカル	2名

フィンランド	1名	南アフリカ	1名
ブラジル	9名	ミャンマー	16名
フランス	9名	メキシコ	2名
ブータン	1名	モロッコ	4名
ベトナム	36名	モンゴル	10名
ベネズエラ	2名	ユーゴスラビア	4名
ペルー	4名	ラオス	1名
ポーランド	5名	リトアニア	1名
ボリビア	1名	ルーマニア	1名
ポルトガル	3名	レバノン	1名
香港	14名		

### ● 学者・研究者の部（スカラー）

国籍別利用者実数（同一人物の利用・同行家族を含まない）

1965年4月から2020年12月までの合計 96ヶ国 3094名（内国籍記載なし17名）

アイルランド	1名	ウズベキスタン	1名
アフガニスタン	1名	ウルグアイ	1名
アメリカ	336名	エストニア	1名
アルジェリア	4名	エジプト	26名
アルゼンチン	1名	エチオピア	1名
アルメニア	1名	オーストラリア	39名
イギリス	111名	オーストリア	19名
イスラエル	11名	オランダ	35名
イタリア	45名	ガーナ	3名
イラク	3名	カザフスタン	1名
イラン	20名	カナダ	47名
インド	107名	カメルーン	1名
インドネシア	115名	韓国	206名
ウガンダ	1名	カンボジア	4名
ウクライナ	9名	旧ソビエト連邦	14名
キルギス	1名	ネパール	11名
ギリシャ	4名	ノルウェー	7名
ケニア	3名	パキスタン	14名
コスタリカ	2名	バーレーン	1名
コロンビア	1名	ハンガリー	10名
コンゴ	1名	バングラデイシュ	16名
ザイール	1名	フィリピン	38名

サウジアラビア	1名	フィンランド	10名
ザンビア	1名	ブラジル	27名
シリア	1名	フランス	111名
シンガポール	25名	ブルガリア	4名
スイス	186名	ベトナム	35名
スウェーデン	16名	ペルー	6名
スーダン	3名	ベルギー	7名
スペイン	11名	ポーランド	32名
スリランカ	11名	ボリビア	1名
スロヴェニア	1名	ポルトガル	8名
セルビア	1名	香港	45名
タイ	187名	ホンジュエラス	1名
台湾	95名	マダガスカル	1名
タンザニア	8名	マレーシア	40名
チェコスロバキア	12名	南アフリカ	2名
中国	172名	ミャンマー	10名
チュニジア	2名	メキシコ	7名
朝鮮（在日）	3名	モロッコ	6名
チリ	7名	モンゴル	1名
デンマーク	5名	ユーゴスラビア	13名
ドイツ	301名	ラオス	2名
ドミニカ	2名	ラトビア	3名
トルコ	22名	リトアニア	1名
ナイジェリア	4名	ルーマニア	3名
日本	329名	ルクセンブルグ	3名
ニュージーランド	10名	ロシア	23名

# 公益財団法人京都国際学生の家の後援会会則

## (目的)

第1条 この規程は、公益財団法人京都国際学生の家（以下財団という。）の後援会員の入会及び退会並びに会費の納入に関し、必要な事項を定めるものとする。

## (会員)

第2条 財団の事業に賛同し、財団を支援する意を有するものは、賛助会員となることができる。

2 会員になろうとする者は、所定の申込書を、代表理事あてに提出するものとする。

## (会費)

第3条 会員は理事会で定められた会費を、入会時に納入するものとする。

2 年会費は会員種別に応じて下記各号のとおりとする。

(1) 個人会員	年額	一口	5,000 円
(2) OM (Old Member 会員)	年額	一口	5,000 円
(3) 法人・団体会員	年額	一口	30,000 円

## (退会)

第4条 会員は、いつでも退会届を財団に提出することにより、退会することができる。

2 前項の場合、当該年度の会費が未納のときは、これを納入しなければならない。  
3 既納の会費は、いかなる理由があってもこれを返還しない。

## (改正)

第5条 この規程の改正は、理事会の議決を経て行うものとする。

## 附則

- 1 この会則の施行に関し、必要な事項は別に定める。
- 2 この会則は、公益財団法人の設立の登記の日（平成 25 年 4 月 1 日）から施行する。
- 3 この改正会則は、平成 26 年 3 月 10 日より施行する。（平成 26 年 3 月 8 日第 3 回理事会にて改訂）
- 4 OM会員を組織する同窓会会則については、別途定める。この改正後援会会則は、平成 31 年 3 月 24 日より施行する。（平成 31 年 3 月 24 日第 17 回理事会議決）

# 京都国際学生の家の同窓会会則

(名称) 第1条 本会は京都国際学生の家の同窓会（略称 OM 会:Old Member 会）と称する。

(所在地) 第2条 本会の所在地は、京都市左京区聖護院東町10番地とする。

(目的) 第3条 本会は、京都国際学生の家の創立趣旨を尊重し、その発展と維持を期し、併せて会員相互の親睦を図ることを目的とする。

(事業) 第4条 本会は、次の事業を行う。

- 1 ) 学寮の運営と発展とを支援する事業
- 2 ) その他、本会の目的に沿う事業

(会員) 第5条 本会の会員は、次の者とする。

- 1 ) 学寮の学生として在籍経験者、
- 2 ) 学寮のハウスペアレント経験者、
- 3 ) 学寮のスカラーとして滞在したことのある者で、学寮を支援する意志を有する者、
- 4 ) 学寮の役員、職員を務めた経験者で、学寮を支援する意志を有する者、
- 5 ) ハウスペアレントの家族であった者で、学寮を支援する意思を有する者。

(総会) 第6条 総会は会員で構成し、開催の30日前までに通知して会長がこれを招集する。

- 2 総会の成立は、日本国内在住構成員の20分の1の出席による。
- 3 前項の出席は、代理すべき構成員を明記した委任状の提出によって替えることもできる。
- 4 定期総会は、毎会計年度の終了後3カ月以内に開催するものとする。
- 5 臨時総会は、会長が開催を必要と認める時、これを招集する。
- 6 総会は次の事項を審議し、議決する。
  - 1 ) 会長、副会長、監事の選任にかかる事項。
  - 2 ) 会則の制定および改正にかかる事項。
  - 3 ) 予算および決算の承認にかかる事項。
  - 4 ) 活動計画および活動報告にかかる事項。
  - 5 ) 会員の退会ならびに除名の承認にかかる事項。
  - 6 ) 本会の解散にかかる事項。
  - 7 ) その他、会長が必要と認めた事項。

(総会の議決) 第 7 条 総会の議決は出席者の過半数の賛成による。

(役員) 第 8 条 本会に以下の役員を置く。役員に関するその他の事項は細則に定める。

- 1 ) 会長 1 名
  - 2 ) 副会長 3 名以内
  - 3 ) 幹事 若干名
  - 4 ) 庶務幹事 若干名
  - 5 ) 会計担当幹事 1 名
  - 6 ) コーディネーター 20 名以内
  - 7 ) 監事 2 名
- 2 本条第 1 項 3 ) ないし 6 ) の幹事およびコーディネーターは会長がこれを任命する。

(役員の職務) 第 9 条 役員の職務は以下のとおりとする。

- 1 ) 会長は、この会を代表し会務を総理する。
- 2 ) 副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるときはその職務を代理する。
- 3 ) 幹事は、事業を円滑に推進するための必要な業務を分担し実施する。
- 4 ) 庶務幹事は、会員に関する名簿の管理その他本会の庶務に係る業務を担当する。
- 5 ) 会計担当幹事は、会計を執行管理する。
- 6 ) コーディネーターは、会員相互の連絡を密にする業務を担当する。
- 7 ) 監事は運営ならびに会計の監査を行う。

(役員会) 第 10 条 役員会は、会長が必要と認める時、これを招集する。

- 2 役員会の議決は出席者の過半数の賛成による。
- 3 前項の出席は代理すべき役員を明記した委任状の提出によって替えることができる。
- 4 役員会は、電磁的通信手段によって開催することも可とする。

(会費) 第 11 条 本会の会員は細則に定める年会費を支払うものとする。会費は本会の維持運営にあて、臨時、特別の活動にかかる費用は別途参加費をもってこれにあてるものとする。

(会計年度) 第 12 条 本会の会計年度は毎年 4 月 1 日より翌年 3 月 31 日とする。

(退会・除名) 第 13 条 第 5 条に定める会員のうち 3 ないし 5 に該当する会員は、そ

の意思を表明することにより、役員会の承認を得て、退会することができる。

2 本会の名誉を傷つける等、本会の会員としてふさわしくないと認められる者は、役員会が発議し、総会の議決を経て、除名することができる。

(解散)第 14 条 本会は、総会の議を経て解散する。解散時に本会が所有する財産は、学寮に寄付するものとする。

(会則改正)第 15 条 本会則の改正は、役員会の発議により、総会でそれを承認する。

(細則)

第 1 条 本会の役員を以下に定める。

会長：村田翼夫

副会長：岩田忠久、ジン・タナンゴナン

庶務幹事：古川千佳、木葉丈司

会計担当幹事：崔英樹

幹事：柳そらや

コーディネーター：内海博司、平松幸三、梶茂樹、坂口貴司、秋津元輝、鵜塚健、前川佳世子、塩沢祥子、村松拓、ケヴヘイッシュウイリ・ルースダン、河瀬光

監事：平松幸三、嘉田良平

第 2 条 会長・副会長・監事の任期は 4 年間を上限として定める。

幹事の任期は会長が定める。

第 3 条 年会費は¥0 とする。

(付則)

本会則は、2019 年 10 月 18 日より施行する。

## 施設概要

所在地 京都府京都市左京区聖護院東町 10

敷地面積 1,900.28 m<sup>2</sup>

建築面積 531.21 m<sup>2</sup>

延面積 1,778.78 m<sup>2</sup>

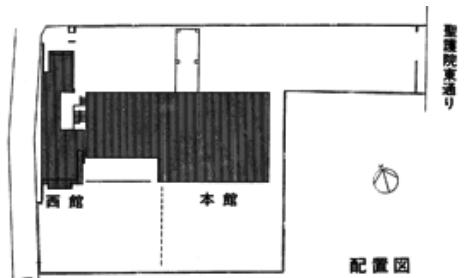
構造 本館 鉄筋コンクリート造 地下 1 階 地上 4 階

西館 鉄筋コンクリート造 地上 2 階

各階用途	本館 1 階	事務室、会議室、ラウンジ、遊戯室、行事用キッチン
	本館 2・4 階	レジデント室 34 室、キッチン 2 室、シャワールーム 4 室
	本館 3 階	ハウスペアレンツ室、スカラー室 7 室
	本館地下	洗濯室、トイレ、倉庫、機械室
	西館	スカラー室 5 室、ボイスカウト会議室

学生居室 面積 13 m<sup>2</sup>

洗面設備、ベッド、  
クローゼット、本棚、  
机、椅子、エアコン



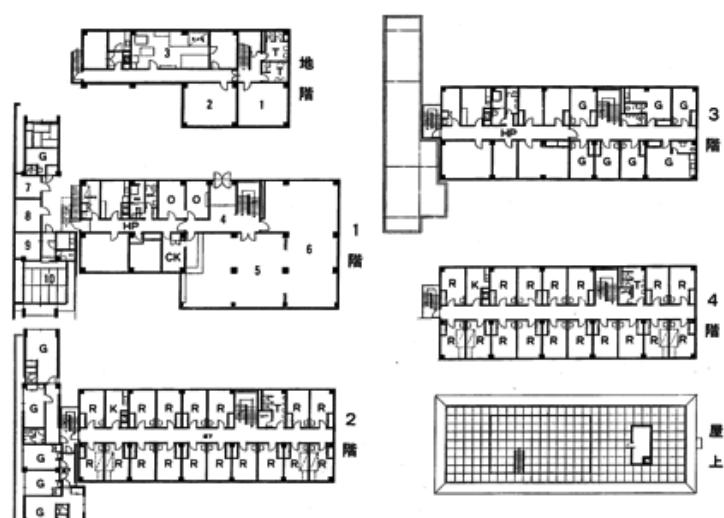
配置図

### その他設備

日本庭園、卓球台、  
ビリヤード、ピアノ

R: レジデント室

G: スカラー室



## 【編集後記】

木葉 丈司  
(イヤーブック編集委員、1988年OM)

年が明けてもコロナの猛威は収まる気配がありません。日夜、医療に従事されている方々には本当に感謝して居りますが、それ以外の人々にも業務、学業初め日常生活に支障が起きている状態。HdBでも予定されたイベントの中止、延期を余儀なくされました。

そのような状態下でも、半年遅れで第2回講演会を開催することができました。加えて依頼したOM及びレジデントの皆様から多数の原稿も頂き2020年度のYear Bookを上梓する運びとなりました。これも偏に関係した皆様の努力の賜物、この場を借りて御礼申し上げます。

先ず懸案事項の本館耐震工事もこの度一段落しました。御協力頂いた方々に感謝すると共にここにその報告を載せて居ります。

さて、私が2年間の寮生活を終えた1988年は長かった昭和が終わろうとする年。そして編集委員を拝受したのは令和元年。その間に平成の31年がありましたが、人で言えばほぼ一世代に相当する期間です。

今回はハウス創立時からHdBを温かい目で見守って頂いた稻垣夫人の御逝去と言う悲しいお知らせをせねばなりません。生前に交流のあった方々と御令嬢の山本夏子様に寄稿して頂き、御生前を偲ぶ事と致しました。

加えて今年の2月3日には、平成25年4月までの長きに亘り(財)京都「国際学生の家」の理事として、その後は平成25年3月まで顧問として御指導して下さっていた同志社大学名誉教授シュペーネマン・クラウス先生(元(公財)日本クリスチャン・アカデミー理事長)が逝去されました。長年の理事・顧問としての御尽力に、あらためて感謝すると共に、心より御冥福を御祈り申し上げる次第です。

第2回公開講演会は12月に開催。講演者はケシャブ・マハラジャン、岩田忠久の両教授。ケシャブさんは1984年入寮の2年先輩、岩田さんは1987年の1年後輩、二人とも1年間に亘り寮生活を共にした間柄になります。30数年を経て思わぬ再会となりました。(尤も何度か合った人もいますが…)

岩田教授の講演内容「生分解性プラスチックは海プラスチック問題の救世主となるか」大学時代の氏は林産工学科でリグニンの研究をされており、シイタケ研究開発をしていた私も何度か伺った事があります。リグニンはセルロースと並んで中々分解が困難な物質。その分解を研究されていた氏が分解とは縁遠いとされるプラスチックの研究をされていたとは驚きでしたが、内容はプラスチックでも海洋分解性を有したもの。学生時代から一貫している訳で事実は小説よりも奇なりです。“木材はプラスチックより木なり”は言うまでもありませんが…。

ケシャブ教授の講演内容「HdB での生活、研究及びその後」  
学生時代の氏は農林経済専攻。私とは学問的には接点は少ないものの同じ北部キャンパスという事でお目にかかる機会は結構ありました。  
今回の講演ではバングラディシュの農業についての内容が主でしたが、ネパール出身の教授にとって彼の地は経度的には近くても緯度的には離れた場所、気候も大きく異なります。どのような経緯でテーマを決められかは分かりませんが、HdB での交流が研究の推進力になった事は確か。論文・出版に際しても Year Book 編集が役立ったというおまけ付きでした。

続く講演会では三名のレジデントが発表。アメリカ、中国、台湾と出身や専攻は異なりますが、新たに留学した場所で五里霧中になりそうな状況下、HdB での日常が勉学や生活の支えになった点は共通しています。

最後は OM で理事の嘉田良平教授が「国際社会で役だった”京都国際学生の家の経験”」というタイトルで講演。言語を習得したり歴史を学んだりしただけでは得られない経験ができる場としての HdB の可能性について熱く語られました。寮生の投稿にも「ハウスが大好き！」との内容が多いのにも頷けます。

また従来レジデントの原稿で別冊を作っていたものを、レジデント人数が少ないこともあってこの冊子に組み込んでいます。今回は「ハウスペアレントとレジデント」という題で 19 名の方から原稿を頂きました。大変な状況下で寄稿して頂いた皆様には感謝の一語に尽きます。

日々の勉学や生活もコロナの為に一変。リモート講義、外出も制限という究極の状況下でも孤立することなかったのは HdB のお陰というのが皆さんとの共通の認識でした。グローバルが叫ばれて久しいですが、単なる広がりに終わるのではなく内容に深みを添えるのが、お互いの絆を深める交流ではないでしょうか。「人間がいかに社会的な動物であるかを感じた」と書いたレジデントも居ましたが、正にその通りだと思います。

『科学に国境はない。』これは近代細菌学の祖・パストゥールの言として知られますが、この後には続きがあります。『しかし科学者には祖国がある。』と。

今では過去の遺物にも聞こえますが、その真意は「学問の発展は以前に学んだ基礎の上に成り立つ。」という点にあるように思います。

HdB に在籍した人々の前途は様々。しかし行先は異なっても、その礎の一部に HdB での生活があるのは確か。このような状況下だからこそ、碩学の言をもう一度、思い起こす必要があるように思います。

HdB の将来は楽観できるものではありませんが、関係者の皆様の力でこの貴重な場をきっと将来に伝えて行く事ができるとの想いを込めて擱筆致します。

以上

**Year Book, Vol.45 2020**  
イヤーブック 第45号

編集者 内海博司 村田翼夫 平野克己  
鶴田正人 古川千佳 前川佳世子  
木葉丈司 Naresh Kumar Verma 村上彩

発行日 2021年3月31日

発行者 公益財団法人京都国際学生の家  
Kyoto International Student House  
(Haus der Begegnung, Kyoto)

〒606-8325 京都市左京区聖護院東町10  
10, Shogoin-higashimachi, Sakyo-ku, Kyoto-shi,  
Kyoto 606-8325, JAPAN Tel: 075-771-3648

印刷所 (株)北斗プリント社 (075-791-6125)

本イヤーブックの印刷・製本・送料の一部は、  
京都市外国人留学生交流等促進事業補助金の援助を受けた。



京都国際学生の家 HdB

<http://hdbkyoto.jp/en/home/>